石巻市

文化財だより

第20号

もくじ

手漕ぎ船調査報告 (1) …… 1

手漕ぎ船調査報告 (2) …… 8

石巻市半島部の板碑 …… 30

旧町名表示石柱設置事業 …… 46

平成二年度文化財めぐり …… 47

文化財標柱・説明板設置事業 …… 48

石巻市教育委員会

手漕ぎ船調査報告 (1)

平成元年度 手漕ぎ船調査報告

石巻市文化財保護委員　鈴木東行

一　調査目的

沿岸漁業で伝統的に使用されてきた磯船・網船・釣船は昭和45年頃から発売されたプラスチック製船の普及と船材の原木の入手困難とあいまって、その使用はまさに終焉期を迎えている。また伝承者は毎年減少し、船大工も共同体を離れたり、職を他に転じている状態である。ここに緊急に伝統的手漕ぎ船について総合的な調査を実施し、保護・保存についての基礎資料を得る。

二　調査期間と調査者

(一)　調査期間

平成元年10月17日より2月27日

調査地

桃浦・月浦・折浜・蛤浜

(二)　調査者

市文化財保護委員　鈴木東行

三　調査報告

桃　浦

(一)　現在手漕ぎ船一艘もない。

(二)　手漕ぎ船（接船）の造船

（話者　船大工後藤善七　明39・3・29生）

(1)　用材の調達

船主が自分の山の木で用意する。木挽きが山に入って木を挽き、船主が山だしの段どりをする。

(2)　主　材

スキ（シキ）の長さ20尺の船で5石…直径8寸以上で杉三本、1尺径では二本。

（注…スキは船底、長さの基準）

(3)　原木から板へ

木取りの墨を入れると木挽に挽かせ板にする。一本の原木からとった板の使い分けは、芯の入った板を水圧の一番かからない上棚に使い、芯脇をスキ、その次を下棚・両外端の板にならない所はこまかい部品に使われる。節には生き節と死に節がある。生き節は船板にしてもアカ（海水）の入る心配のないもの。死に節は割れがあったり、ガサガサで押すとぬけてしまうもので、そのままで使えない。そのような節は板を使う時に抜いて、新しく埋め木をする。

(4)　部　材

ミヨシ……欅木

ス　キ……杉

チ　リ……杉、松なんでもよい

ト　コ……松

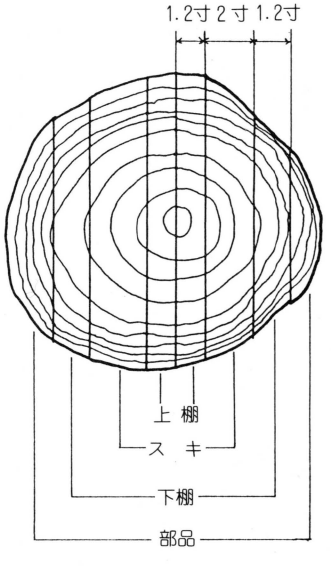
(5)　設計図

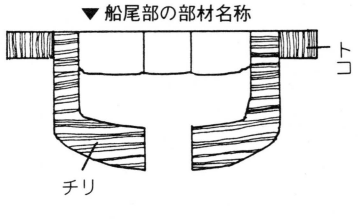
手板に引くのは棟梁がする。

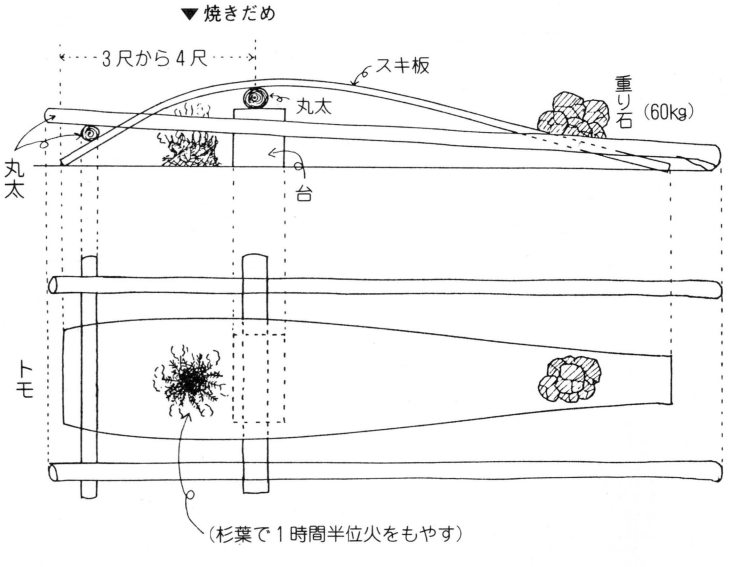
(6)　スキの撓め方（焼だめ）

船大工が特に意を用いるのはスキをタメることである。操船を容易にするため少し曲げるわけである。焼きだめと言ってスキ板の一方を固定し、その端に60kgほどの重り石をのせて、火をたいて曲げていくのである。焼きだめをかけるのは、トモの方から3尺から4尺のところで5寸ぐらいタメる。（但しスキ20尺）

（注…鮑とり船の場合はスキをタメすぎると波がバフバフとあたり、気泡になり、海底にいる鮑をのぞいているメガネ（ガラス箱）を曇らすので、あまりスキをタメない方がよい。）







(7) はぎ合わせ

上棚は船の深さによって2枚から3枚にし、中棚には一番よい材料を用いる。

・はぎ合わせの順序

① スミサシでクジ引をする。

② クジ引き通りにカンナをかけ

③ 両方を木殺しする。(ハンマーで叩き圧縮する)

④ 両方をカスガイでとめる。

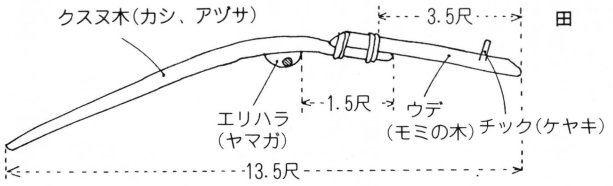
⑤ ノミで穴をあけ、斜めに釘打ちする。(四の(2)の③④参照)

⑥ 穴に埋め木をする。

(8) 外装

ニラと言って虫がつくのでコールタールを塗り、トモのトダテには各家の家印を焼判で押したり、書いたりした。

◀桶田



・定置網の櫓は立派でなくてよい

・沖船の櫓は幅の広い赤ガシが一番良い

・ヤマガのエリハラは一番良い

(9) 船具

櫓・櫂・舵・アカトリ・竿・カギ・綱(オモテとトモに)。

(10) 一艘の手間

① 材料の伐り出しと乾燥……3ヶ月

② 船のできあがり ……13日～14日、一人で朝5時～午後6時まで、夏。

③手間賃はスキ20尺の船で、戦後20万円で請け負う。

(11) 耐用年数

約10年間、雨が降った時はイタゴをはずして、すぐ塩水をかける。

(12) 造船場所

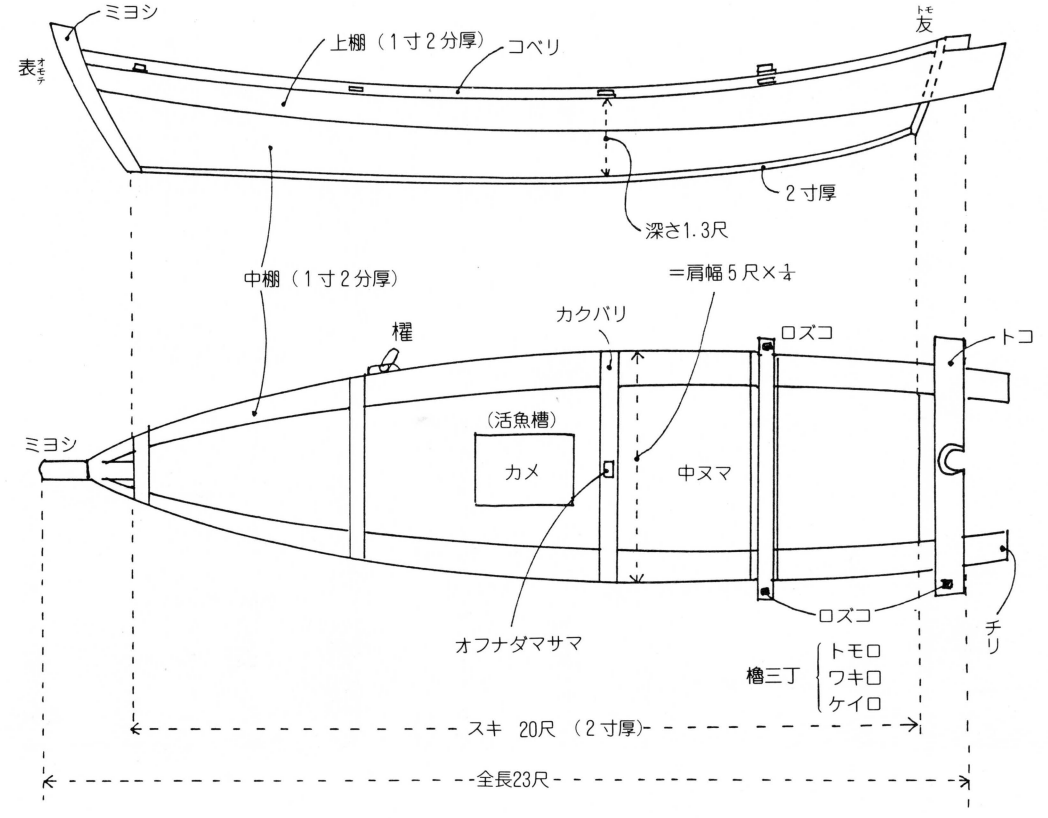
作業小屋はなく、打瀬船を造った時は、西の磯崎の浜で造った。今は船揚場のわずかなよせでつくっている。他の浜からの注文は出張して造った。小竹・蛤浜・折浜。

(13) フナオロシとオフナダマサマ

フナオロシの当日、進水の前にフナバリの真ん中をほってオフナダマサマと称する御神体を船大工がはめ込み、次に餅と船主の年令の数だけマキ銭を紙にくるんで人々にまき、船主・神主、船大工がオフナダサマに供え餅と御神酒をあげて拝む。この時、謡三番を唱い、船に綱をつけておろし、船に子供達を乗せて「左強いか」「右強いか」と言って試乗する。(注…オフナダマとは一銭銅貨12枚(うるう年には13枚)・サイコロ2個と紙で作ったメ(女)とオト(男)のオヒナサマを抱き合わせにしたもの)

(三) 「ワセン」定式寸法

(話者 船大工 後藤善七)



(四) 船大工

（話者　遠藤善七）

(1) 修業

① 年季奉公（棟梁、鈴木留蔵に弟子入り）……15歳～21歳

② お礼奉公　……22歳

③ 独　立　……23歳

④ 動力船導入のため28歳の時、石巻の山西・村上造船で2年間修業

（注…遠藤善七氏のように浜で独立して造船に従事している職人もあれば、田代島仁斗田出身の遠藤四三男（現住所…石巻市松原9～28、明36・10・28生まれ）氏の場合のように一人前になっても田代島大泊浜の大網の瀬主、津田治七に帰属して網船（ダンベ・ドッキ）の修繕に従事し、大網漁がキリアガル（旧九月）と渡り職人として伊豆・伊東・陸中に出掛、かせぎながら腕をみがき、旧二月のキリハジメに田代に戻って仕事に従事する船大工もいる）

(2) 大工道具

（写真①～⑥参照）

①・マサカリ　②・小バ

・チョンナ　・中バ

・カンナ　（ノコギリ）

③・ツキノミ

・一寸二分のヤッコノミ

・ヤッコノミ

（ヤッコノミは平ノミとも言って「カシラキリ」と言って船材のはぎ合わせの時、釘頭（くぎがしら）の穴を彫（ほ）るノミ）

④・クギノミ（ツバノミ）

（船釘はそのまま打つと曲がってしまうので、あらかじめクギノミで穴をあけておく）

・片クギノミ（片ツバノミ）

（はぎ合わせる板の双方にクギノミ（ツバノミ）で穴をあけた後、片クギノミで穴合わせする）

⑤・釘ヌキ

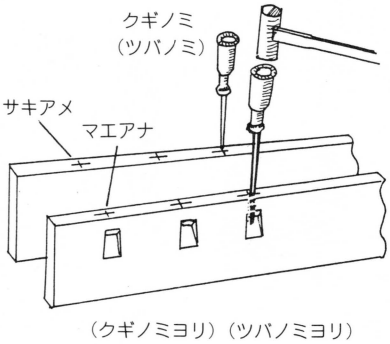
・自（じ）金（がね）

・曲　金

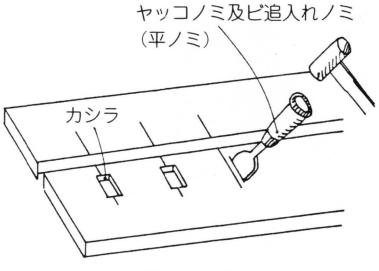
⑥・スミツボ

⑦・フナクギ

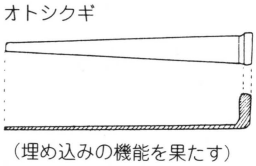
渡波の鍛冶屋か石巻のハシジメより購入



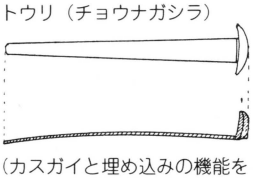
（クギノミヨリ）（ツバノミヨリ）



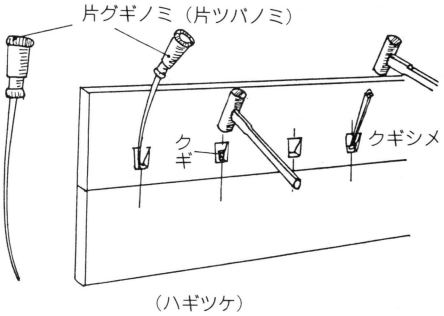
（カシラキリ）



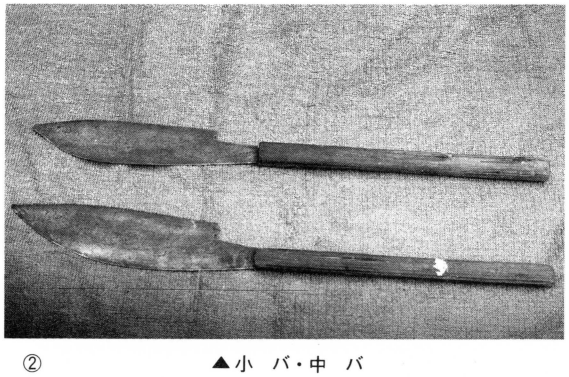
（埋め込みの機能を果たす）



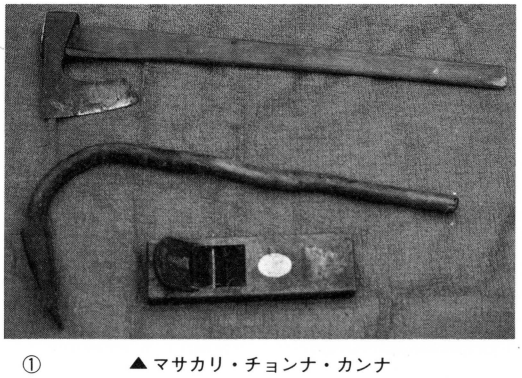
（カスガイと埋め込みの機能を一本で兼ね備えたもの）



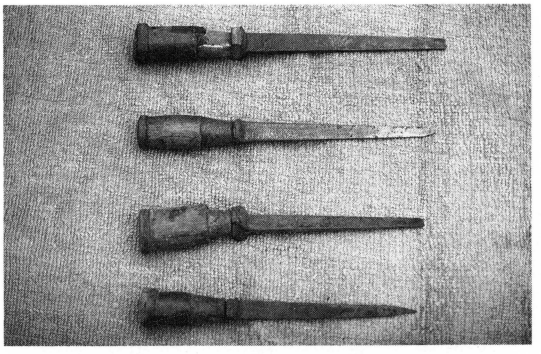
（ハギツケ）



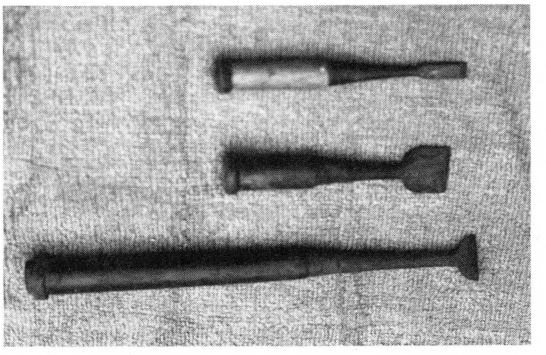
② ▲小　バ・中　バ



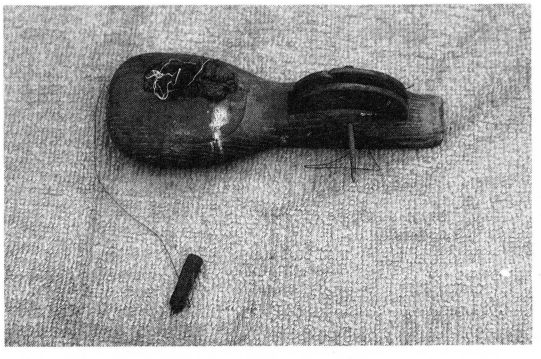
① ▲マサカリ・チョンナ・カンナ



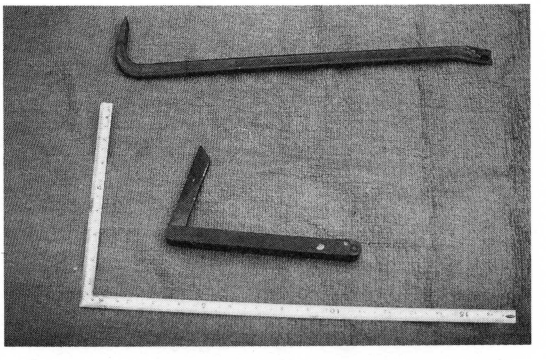
④　▲クギノミ（ツバノミ）



③　▲ツキノミ・1寸2分のヤッコノミ・ヤッコノミ



⑥　▲スミツボ



⑤　▲釘ヌキ・自（由）金・曲金

(五) 桃浦の漁の種類・船の呼名・型・寸法

（話者　後藤辰男、遠藤善七）

漁場	種類	呼び名・船型・寸法	備考
磯	あわび	船の呼び名ない、2階棚型、スキ12尺（丈2）、肩幅4尺、深さ1尺～1.1尺、一人乗り	瀬主5人いたが、現在1人に権利を売った。ガラスをのぞき、カギでとる。
	わかめ、ひじき、いそのり	「ワセン」2階棚、2人乗り、スキ20尺～21尺、肩幅5尺、深さ1.3尺	鎌の先に竿をつけ海藻を刈りとる。
地先沿岸	水晶型器械網（定置網）（このしろ、ふくらいわかな、いわし）	「ワセン」2階棚、2人乗り、スキ20～21尺、肩幅5尺、深さ1.3尺、1艘	昭和10年頃まで、現在はツボ型定置網いわしは肥料とメザシ。
	モノ器械定置網（小鯛、たつ魚）	同上　2人乗り、1艘	ゴザネ（竹をたばねた浮子）に網をつけた定置網、囲網は縄を使用。
沖合	縄（な）ぶつ（いしなぎ、長さ3尺の高級魚、肝は薬）	呼び名「沖船」型…不明、10人乗り、スキ40尺、帆がけ八丁櫓、擢なし	明治40年頃、田代・網長の沖のギラ（底根のある所）につく、縄（ナ）をあげる時、重いので「テッカ」を手にはめてひっぱり揚げた。
	鰹1本釣	帆掛け	大正2年大シケで5艘のうち2艘沈没、操業しなかった。
	打瀬網	「ミカワセン」（角帆）	田代沖（6月～9月）のギラにつく根魚、なまこを漁獲

注…戦前、渡辺兵治（屋号・カワジリ）田代に大網かける

月浦

(一) 現存、手漕船一艘。阿部武雄所有、現在使用中。昭和四二年五月進水。荻浜、斉藤正人造船。呼び名「コブネ」。二階棚型。磯物（あわび）・すずき縄など漁する。スキ丈三、深さ一・三尺、肩幅四尺（写真⑦参照）

(二) 漁の種類・船の呼び名・型・寸法

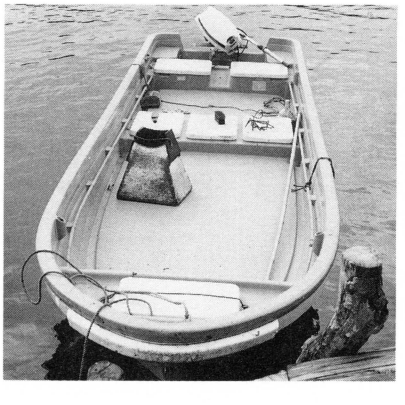
（話者　阿部喜一大正10・1・3生）

(1) 昭和55年度の月浦の漁業習俗（東北歴史資料館）の調査で船大工新保吉太郎（大正9・2・1日生まれ）は「サッパ」（一階棚型）は牡鹿半島の裏浜（特に江ノ島）で使用し、月浦では「ワセン」（タナヅキ二階棚型）を使用していると言っていたが、今回の話者阿部喜一（大正10・1・3日生まれ）も一階棚型は波が荒いため使用したがらないと言うことである。

(2) 昭和13年頃までヤキダマ式動力船が一般化していた。昭和30年代、ディーゼル・チャッカが普及し、センガイ機、プラスチック船の導入は20年位前からである。木造船は風に対する抵抗力あり漁によいが、ニラ（虫が船につく）で穴があくので、年二回の手入れ、（浄化）修理に金がかかり、又、プラスチック船より金額（スキ丈3で）が高い。

	漁の種類	呼び名・型・寸法	備考
磯	磯物とり（あわび、コツ突き カゼ、てんぐさなど）	「イソグリ船」、2階棚型、1～3人乗り、スキ丈1～丈3（1丈三尺）、肩幅3.5尺～4.5尺、深さ1.5尺	昭和63.3.23予備調査では、わかめとり「ワセン」、二階棚（「タナヅキ」）、2人乗り、丈物、あわびとり「イッケコ」、1階棚、シキ1丈（丈物）、肩幅3尺、高さ1.5尺
地先沿岸	小網（メガネ式落網 大正初期は大謀式 鰹の餌の生き鰯 肥料、メザシ用）	2艘でおこす ①「ドエ」、ダンベ型、7～8人乗り。スキ21～23尺、肩幅5.3尺、4丁櫓、4擢 ②「タカ」、ワセン型（2階棚）、3～4人乗り、スキ18尺、2丁櫓、1擢、深さ2尺、肩幅5尺（部落3か統）	大正初期まで3艘でおこす。 ①ドエ②タカ③沖船ドエはダンベ型、タカと沖船はワセン型、水夫は婦女子、昭和15年、共同網やめ個人に貸しつける
	定置網 水晶型器械定置網（いわし、さば、青すずき、白魚）	「ワセン」、2階棚型、2人乗り、スキ16～18尺、肩幅4尺、深さ1.8尺	10年前まで5か統あった
	鰈刺網	「ワセン」、タナヅキ（2階棚型）、2人乗り、スキ16～18尺、肩幅4尺、深さ1.8尺、2～3人	3丁櫓、擢は使用せず。
	手繰網（しゃこえび、かじか）	「ワセン」、タナヅキ型（2階棚型）、スキ（シキ）18尺、3丁櫓	明治末～大正初め
	延縄（どんこ、すえ、はぜ すずき、はも）	「ワセン」、タナヅキ型、スキ15～18尺、肩幅4.2尺、深さ1.5尺	どんこ、すえ（根魚）…小縄、はぜ縄、すずき縄、はも縄と魚によって縄がちがう。
	こしき網（なまことり）	「ワセン」、タナヅキ型、2人乗り、1人乗り、スキ15～18尺	少数のみ
沖合	鰹一本釣 はも筒	「ワセン」、2階棚型	金華山沖 田代、網地島沖

▲「コブネ」2階棚型 磯船
月浦　阿部武雄 所有



▶プラスチック製船・月浦

折ノ浜

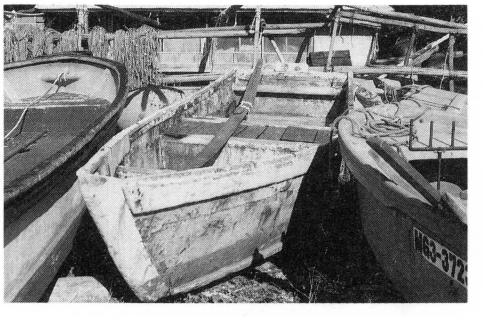
(一) 現存　手漕船四艘　竹沢囲前網浜

① 平塚子之吉（㊐）所有、湾内でシャコエビとりの刺網船として使用、「イッケコ」（写真⑨参照）

▲「イッケコ」刺網船（シャコエビとり）
折浜　平塚子之吉 所有

▲「タナヅキ」二階棚型 網船
折浜　亀山　巌 所有

② 亀山巌所有。破損、腐朽。網船「タナヅキ」（二階棚型）（写真⑩参照）



▲「イッケッコ」1階棚型 スキ丈3 肩幅4.5尺
深さ2尺 磯船　　折浜　四野見芳吉 所有

▲「イッケダナ」スキ丈3 深さ1.4尺 磯船
折浜　亀山　巌 所有

③ 四野見芳吉（大正1・12・16日生）所有。収集許可　祝田の阿部造船でつくる。「イッケコ」スキ　丈3。肩幅4.5尺。深さ2尺。鮑漁・延縄・定置網に使用（写真⑪参照）

④ 亀山巌所有、現在使用せず。石巻市袋谷地、相沢大工造船、「イッケダナ」スキ　丈3。深さ1.4尺（写真⑫参照）

(二) 漁の種類・船の呼び名・船型・寸法。（話者　亀山　巌）

漁場	漁の種類	呼び名・船の型・寸法	備考
磯	あわび（カギとり）	「カッケダナ」、1階棚型、1人乗り、スキ丈3、深さ1.4尺	船大工は桃浦の後藤善七、袋谷地相沢大工（話者による）
	わかめ	同上　2人乗り	カマに竿をつけ刈り取る
地先沿岸	水晶型器械定置網	「タナツギ」、2階棚型、2人乗り、スキ19.5尺、肩幅6.5尺、深さ1.7尺	シッツク大工が造船
	筒伏（どうぶせ）定置網（いわし、鰹の餌用）	呼び名不明、10人乗り、スキ23～24尺、肩幅9尺、深さ2尺、櫓4丁～5丁、擢4丁～5丁	漁場は小竹～折浜の中間。組織－瀬主 ↓ 船員－［船頭＋水夫＋女］
	釣船		
	小縄（ねう、どんこ、はも青）	「イッケコ」、1階棚型、スキ丈3、肩幅4.5尺	船揚場は竹沢囲前網浜（浜の東端）造船は西の真浜

① 桃浦、月浦と比較し、磯船・釣船に「イッカイダナ」（1階棚型）の利用が目立つ。

蛤浜

(一) 現在、手漕ぎ船、一艘もない。

(二) 漁業と手漕船

(話者　平塚又右衛門　大正8・12・9日生まれ)

(1) 戸数と漁船数（昭和10年代）

戸数　15

船数　「タナヅキ」二階棚型……7艘

「イツケッコ」一階棚……5艘

機械船（沖の縄ぶつ専門）……3艘

(2) 漁期

旧暦月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
漁の種類	うけぐり網			うけぐり					うけぐり			
	ハゼ			シャコエビ					(カレイ)			
						ひらめ縄						
		こしき網				(金華山沖)						
		ナマコ										
								テングサ				
	アワビとり										アワビとり(特定の人)	

(3) 磯漁・釣漁（縄）・うけぐり網漁

も、「タナヅキ」二階棚型の一艘の船で兼用した。

スキ　丈5。肩幅5尺、深さ2尺

帆かけ、二丁櫓。櫂2丁。

船大工……桃浦出身の大山造船（大山惣助）

(4) ひらめ縄漁

「タナヅキ」三人乗り、二丁櫓。櫂一丁に帆をかけて、カメ（活魚槽）にイワシを活けて、朝2時船出、12時に目的地、金華山沖に着く。夜縄をぶって早朝にあげる。一斗樽に飲料水を入れ、石油カンのクドで煮炊きして食事をとり、鮎川港に入港し、石巻に行く巡航船に魚をおろす。三日間位漁をし、浜に帰ってくる。

四　調査結果から

(一) 現在、海上で使用している手漕ぎ船は月浦の一艘のみで、折浜の四艘は浜にあげられて、腐朽を待つ運命にある。収集許可された一艘を市で緊急に確保しておくべきである。

(二) 月浦・桃浦は磯船・網船・縄船にタナヅキ二階船型が主流をなし、月浦は磯船にスキ丈3、網船・縄船（釣船）の主流はスキ丈6～丈8が標準型である。桃浦は磯船のあわび船は丈2。網船とわかめとり船はスキ二〇尺が主流をなしている。

折の浜は前者に比較して磯船・釣船も「イッカイダナ」一階棚型の利用が目立つ。

蛤浜は地先沿岸に定置網に適した所がないため、地先沖を流し航行するウケグリ船や沖に進出し、金華山沖でがっちりした「タナヅキ」二階棚型　丈5、二丁櫓、櫂2丁、帆かけ船でひらめ延縄に従事する結果になっている。このような傾向は祝田浜のめのけ延縄船（「タナヅキ」6人乗り、4丁櫓、2櫂）の金華山沖、進出にも見られる。

(三) 昭和51年の宮城県民族資料緊急調査では、田代・小渕・江ノ島で磯船（特に鮑カギとり）、定置網船にカツコー（くり船から発達した準構造船）を使用したと伝承者は語っている。今回は採訪することが出来なかった。

準構造船の伝承者の発見と文献資料の発見に意をそそぐべきである。

(四) 船大工の分布については南は小網倉を中心としたグループ、荻浜・月浦・桃浦グループ、石巻祝田のグループと石巻市内があり、今回の調査では各浜の漁師は必ずしもグループに左右されないで船を注文し造船している。

(五) 三陸海岸地方の船大工に「一寸倍」という言葉がある。それは基本的な一寸の差が（スキの）船形に決定的な変化を与えるという意味と解釈されるが、それぞれの分布地域に固有の船型が存在するということでもある。特に漁船は漁浦より漁場までの航行用具であるとともに、漁場にあっては作業場であり、船型や構造は漁場にあっては作業場であり、船型や構造は漁場の自然的な様相と漁種に即応し、主材の強度と帆走を含めた人力による漕力、さらに船上作業上での人体との調和などの諸条件によって、永い年代にわたる経験により改良が重ねられたものであり、完成度の高い、地域固有の定式寸法が案出されている。今後の広域的な総合調査が必要である。

最後に今回の調査期間は浜で一番多忙なカキむき時季である。調査地の区長、話者の協力的姿勢に心から感謝して結語とする。

手漕ぎ船調査報告 (2)

平成二年度 手漕ぎ船調査報告

石巻市文化財保護委員　鈴木東行

一　調査目的　前年度に同じ。

二　調査期間と調査者

㈠　調査期間

平成二年七月四日より二月二八日

調　査　地

祝田浜・萩浜・福貴浦・鹿立・狐崎・竹浜・牧浜・仁斗田浜・大泊浜。

㈡　調　査　者

石巻市文化財保護委員　鈴木東行

三　調査報告

祝田浜

㈠　現在、手漕船は一艘もない。

㈡　船大工と接船の造船について。

話者　船大工　阿部忠雄

（大正2・11・19生）

(1)　系譜と修業

・系譜

津田国蔵→父　阿部忠之亟→忠雄→善雄

・修　業

渡波尋常小学校を卒業と同時に父忠之亟の内弟子になる。親子の仲と雖も、仕事については厳しかった。「人の仕事を見て、覚えよ」と言って、手をとって教えたことは一度もなかった。

父は「自分で小船を造れる位だったら、一人前だ」と語った。その言のようになったのは20歳頃であった。昭和八年（二一歳）、女川町江の島から嫁を迎えた。それが縁で、後で江の島のサッパ（磯船）を手掛けることになった。その後、女川の阿部慶三郎造船、石巻の造船所で動力木造船の造り方について修業した。

・独立

昭和13年（二六歳）で、父から独立して、船主のいる浜に行って場所を借りて船を造った。（注…職人は居職と出職あり、この場合、出職に当たる）

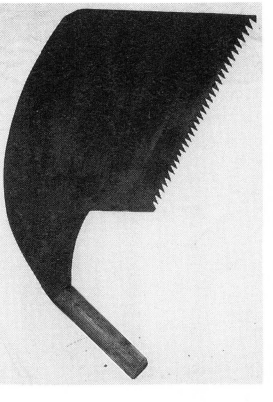
手掛けた磯船は万石浦の種ガキ用ダンベ・佐須浜の小船チョロコ・小竹方面のイッケコ・江の島の鮑取りのサッパなどである。

昭和45年（四七歳）、現在地（祝田浜字祝田）に落ち着き、造船場をつくり、息子善雄と半島の漁師の機械船の注文に応じて、今日に至っている。

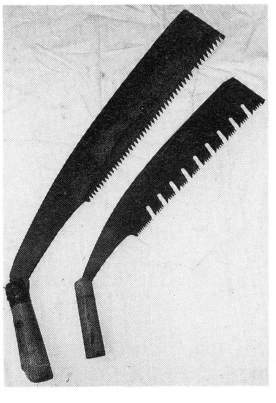
(2)　大工道具

・木取り（製材）の道具

木挽鋸（前挽き）。ヨコビキ。メガネノコ。（写真1・2参照）



◀写真1　木取り（製材）の道具
①木挽鋸（前挽き）



◀写真2
②ヨコビキ（左）
③メガネノコ（横に切る）

・船材を加工する道具

チョウナ。マサカリ（写真3参照）

荒シキ（横ぎり）。細鋸（万能鋸）

（写真4の②③参照）

・船板の接合せ作業具

①墨つけ用具（ツボカネ）

曲金。墨サシ。墨ツボ

（写真5参照）

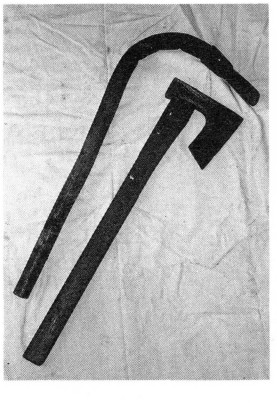
②ツバノミより道具

船釘をそのまま打つと曲がってしまうので、あらかじめツバノミでハギジに釘穴をあけておく

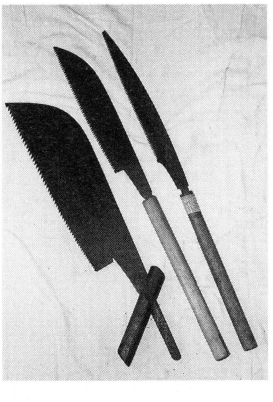
ツバノミ

（船釘を打ち込むハギジに前穴・先穴をツバノミとゲンノウであける）

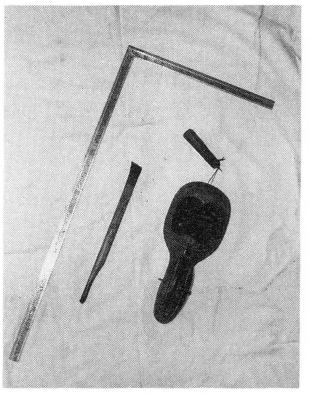
（写真7・8の③④⑤⑥。平成元年報告書の図参照されたし）



◀写真3　船材を加工する道具
①チョウナ（上）
②マサカリ（斧）（下）

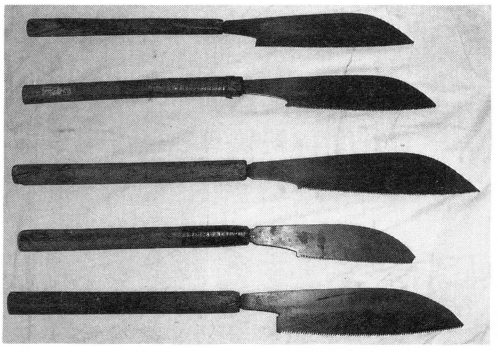


◀写真4
・スリ合せ用具
左①オオドシ（大きい船の船板用）
・船材を加工する道具
②荒シキ（ヨコギリ）
③細ノコ（万能）



◀写真5　・墨つけ用具（「ツボカネ」）
①曲　金
②墨サシ
③墨ツボ

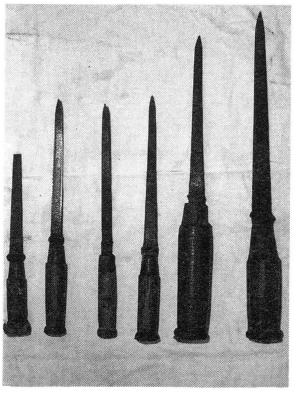
③スリ合セの道具
オオドシ（大きい船の用材を挽く）
（写真4の①参照）
中　歯
小　歯（仕上げ用鋸）（写真6参照）

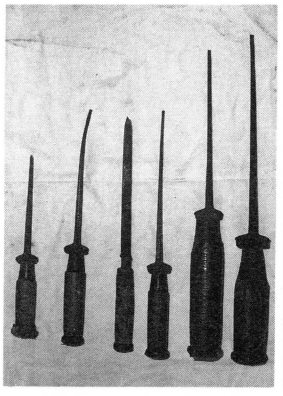


▲写真6　「スリアワセ」の道具
上から①②③…小歯（仕上用）④⑤…中歯

④穴合わせ用具
はぎ合わせの板の双方にツバノミで穴をあけた後、片ツバノミで穴合わせをする
片ツバノミ
（写真7・8の①②参照、平成元年報告書の図参照）

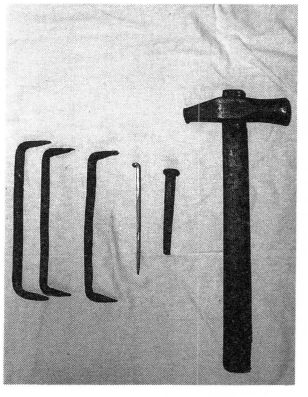
◀写真7・8
・穴合せ用具
左より①②片ツバノミ
（①は先が折れた）
・ツバノミより道具
③④⑤⑥ツバノミ
（船釘を打ち込む穴をあける）





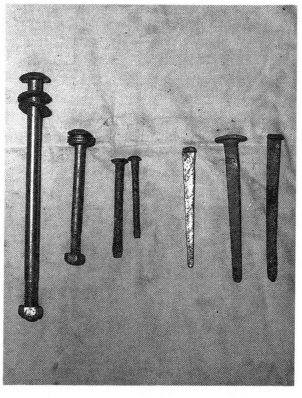
⑤ハギ付ケ道具（船釘を打つ道具）
釘シメ。ゲンノウ。
（写真9の⑤⑥参照）

◀写真9　ハギツケ道具
左から①②③…カスガイ
④　…オトシ釘
⑤釘シメ
⑥ゲンノウ　釘を打つ道具

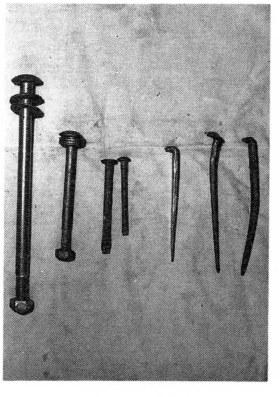


・船釘とボルト
カイオリ…コベリをハギ合わせる釘
トウリ　…シキとタナを接合せる時、用いる釘
オトシ　…船板と船板をハギ合わせる釘
ボルト
タック　…船のろっ骨（マツラ）を止める
（写真10・11参照）

◀写真10　船釘とボルト

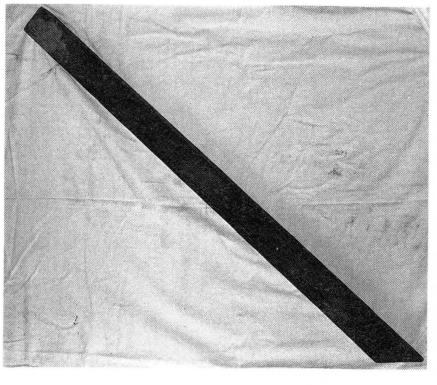


◀写真11　船釘とボルト

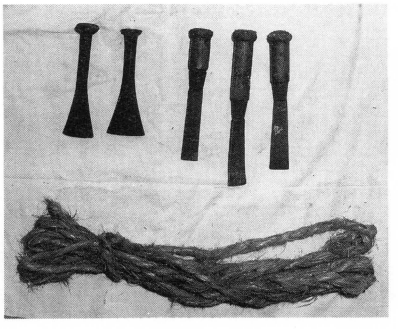


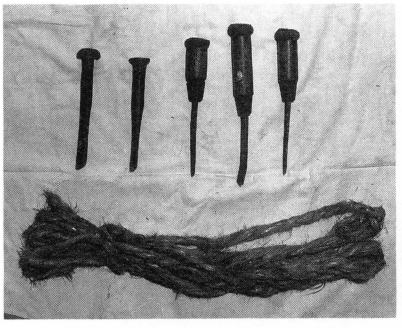
・ヒラキ（角度）を測定する道具
ヒラキ棒　（写真12参照）

◀写真12　ヒラキ棒（ミヨシ、トダテ、タナのヒラキを測定する時使う）



・マキハダを打つ道具
ハギ合わせた板のすき間から水が漏れないようにマキハダをつめる。
口開ケヤットコ
ナラシ。ウチコミ。
マキハダ。
（写真13・14参照）





◀写真13・14　・マキハダを打つ道具（ハギ合せた板のすき間から水が漏れないようにマキハダをつめる道具）
左より①②ウチコミ
③ナラシ（マキハダ用）
④ホーコンナラシ（ホーコン…油つけた麻）
⑤口開けヤットコ
⑥マキハダ（檜の中の皮で、できている）

(3)　造船工程

・用材の調達

昔は船主が自分の山の木で用意したが、船大工の請負制になり、木挽を山につれて行き、用材になる立木を自分で選定し、現場で木挽に船板（ケイゴ）を挽かせた。

最近は製材所に行って選定し、船板の製材を頼む。

伐り出しは山の神に御神酒を上げておがみ、それから作業をはじめる。伐り出し人が拝むのが通例だが、依頼人が拝む場合もある。

・主　材

シキ（スキ）の長さ18尺5寸のサッパ（女川町江島）の場合、一艘の杉材の石数は5石である。石数の単位は丸太で径一尺×長さ10尺である。

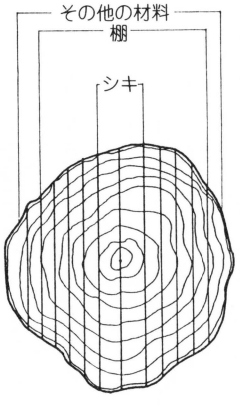
注…スキ（シキ）は船底で船の長さを言う場合の基準である。

・原木から船板へ（木取り）

一本の原木からとった板の使い分けは左図の通りである。

良質杉材、年輪四〇年～四六年（普通八〇～一〇〇年経たものが良材である）

注…杉材が良であればシキは、芯部からとるが、普通は芯部は棚でその両わきがシキをとる。平成元年の報告書参照



船板（ケイゴ）は製材してから一カ月、ただ並べ立てて乾燥したり、ハセ架けにして乾燥したりする。

節には「生き節」と「死に節」がある。生き節は船板にしてもアカ（海水）が入らないので、そのまま使い、死に節は、そのままで使えないので抜いて新しく埋木をする。赤味のケイゴをアカダと言い良質、白味のものをアマと言い腐れやすい。

注…白味のものをシラダ、外側をアマと言っている地方もある。

・部　材

ミヨシ……欅か桧
床……松が桧
シキ板（板子）……クヌギ
フナバリ…桧
逆木……ミヨシ・カジ・タツ（とも綱などを結ぶ桂）など逆木でもかまわない。欅である。

・設　計　図

杉の板に実物の10分の1の縮尺で書いたものを「手板」と言う。棟梁が書く。トモを左むきに、スキ（シキ）の型取りは折ズミに書く。

（写真15・16参照）

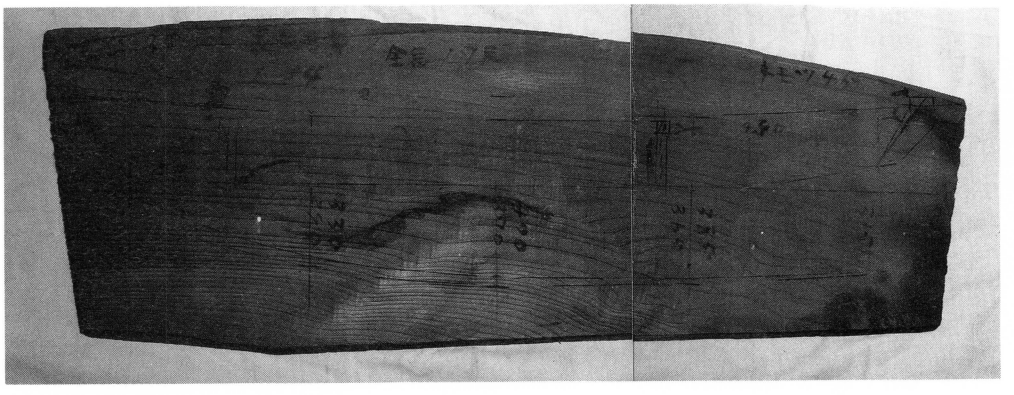
・定式寸法

①　縮尺30分の1の定式寸法（図1・図2）

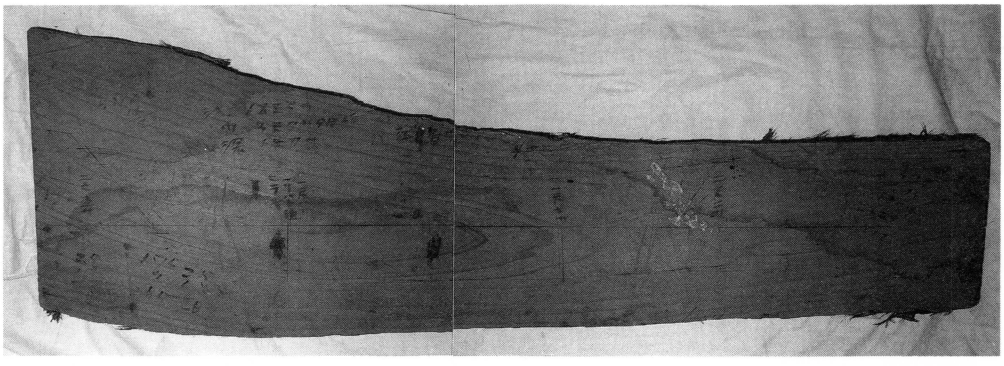
作図者…阿部忠雄

小竹イッカイ棚

シキ長　……15尺5寸
シキ幅　……3尺7寸
深　サ　……1尺4寸

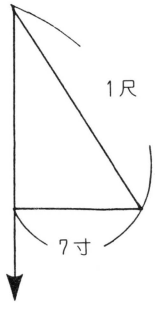


◀写真5　小竹「イッカイダナ」手板（実物の1/10の設計図）



◀写真16
江ノ島サッパの手板
（1／10に縮尺した設計図）

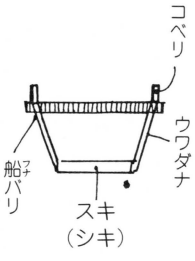
ミヨシのヒラキ……7寸
トダテのヒラキ……6寸
女川町江島サッパ
シキ長……18尺5寸
深　サ……1尺8寸
シキ幅……3尺8寸
ミヨシのヒラキ……7寸
トダテのヒラキ……6寸
注…シキの型取りは図1・2を参照
図は折ズミでヨコズミの$\frac{1}{2}$になっている。ヒラキとは角度（斜角）で1尺に対して何寸という。

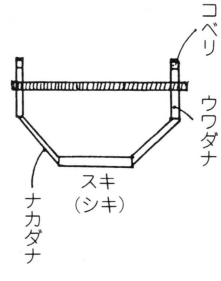


（ヒラキ）（7寸の場合）

② 船の主要な各部の名称

船　板……ケェゴ（用材の船板）
船　底……シキ（スキ）
棚　板……ウワダナ・ナカダナ。
注…棚とは舷板で一枚棚の舟を「イッカイダナ」と呼び、二枚棚の舟を「タナヅキ」などと称する。





タナを受ける梁　……フナバリ
船バリの下に入る板　……ハリキリ
ウワダナの上縁に取りつける補強材　……コベリ
トモの櫓と舵を据える台木　……トコ（床）
シキ板　……板子
・ケイゴ（船板）の接合わせの順序
① はぎじ合わせ
板のつなぎ合わせる面にカンナがけをする。
② 墨つけ
船くぎを打った穴を決めるためスミツボ・スミサシ・曲金を使い印をつける。
③ カシラ切り
船釘の頭がうまる穴をハギ地にシバノミ（平ノミ（ヤッコノミ））で彫り、細ノミで掘り込む。
④ ツバノミより
ツバノミをゲンノウで叩き、ハギ地の両方に船くぎを打ち込む穴をあける。
⑤ スリ合わせ
板のつなぎ合わせる面（ハギジ）を、最初、2回位、中歯鋸で縦びきし、だんだん間隔がせまくなってきたとき、小歯で仕上げる。
注…鋸でスリ合わせをするかわりに、スミでクチ（クジ）引きをし、両方のハギジ（ハギズ）にカンナをかけるクチ（クジ）引きの方法がある。
⑥ 木ごろし。
スリ合わせをした面をゲンノウで叩く。
注…場所によっては木ごろしを先にする。板はどんなに上手につないでもカンナ合わせではアカ（水）がさしてくる。目の細かい鋸で「スリ合わせ」をし、木ごろしして、はじめてアカが止まる。
⑦ 穴合わせ
板を合わせ、ハギ地の両方の穴が合っているかどうかを片ツバノミでさしこみ、確かめる。
注…平成元年の報告書のクギノミの図、参照
⑧ ハギ付け
板をつなぎ止めるために、船釘をクギジメをさし込みゲンノウで打つ
⑨ 埋め木
船釘の打ち込まれた穴に埋木をする。
注…スリ合わせ面に漆を塗った人もあるが、自分はまけるので、あまり使用しなかった。
釘間…・オトシ（ヌイ）釘の場合、7寸から8寸
・トウリ釘は5寸間（スキとウワダナのハギ合わせ）
・コベリをとめる釘はカイオリ釘で間は1尺1寸。

・シキの焼撓め

乾燥したケイゴ（船板）ほど撓めが早く、スキ長一八尺五寸のサッパの場合はトモで四・六尺で7寸から7寸5分ためる。ため場所には目張をして、水をかけかけ、約2時間、杉葉をもやす。スキは丸太で固定され、端のスキの上に重り石をのせる。

注…平成元年報告書の焼撓めの図を参照。

・シキズエ

焼撓めされたシキは、翌日、ヨコズミ線で台に載せられ、シキに穴をあけ、ボルトとカスガイで台にしっかりと固定される。シキの上に重り石を載せ、作業中、シキが動かないようにする。トモ部は所定の反りにしてハリで支え固定する。

・ミヨシ・トダテの取り付け

シキズエが終了するとミヨシとトダテ（トモの）のヒラキを測定し、取り付け固定する。次に船の各間のハリキリが入れられ、シキリもつける。

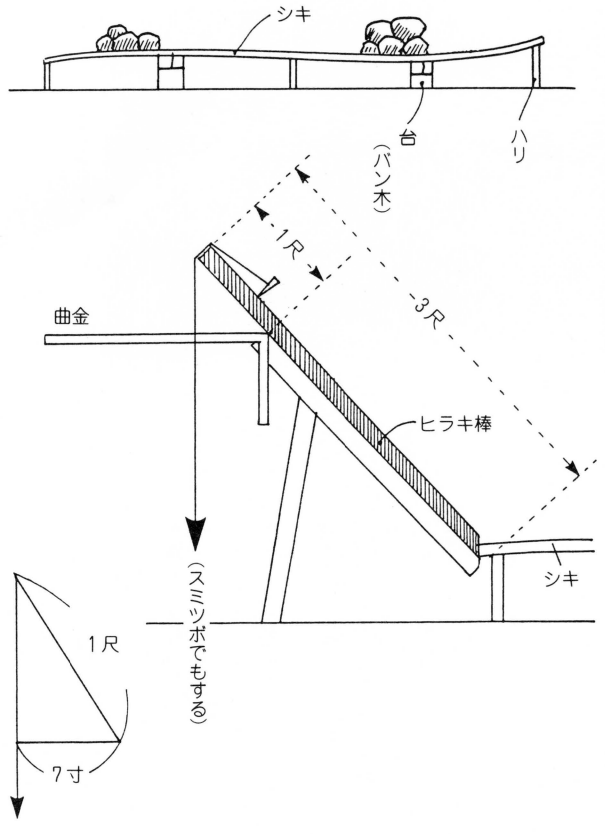
① 下げぶり

シキの真ん中（仲ズミ）にあがって水糸を下げぶりし、ミヨシの仲ズミを見透かす。

注…仲ズミに定木を立てミヨシの仲ズミを見透かし、ミヨシが垂直になるようにする。

② ヒラキの測定

ミヨシとトタデの角度をヒラキ棒を用い、曲金をあて、1尺に対して何寸と測定する。



・タナの取りつけ

小竹イッカイダナ（シキ長15.5尺）

① タナのヒラキを測定する

オモテ……8寸3分

トモ……9寸8分

② スキとタナの取り付け

釘はトウリで釘間は5寸で打った穴にパテーを埋める

・コベリの取りつけ

江島サッパ（シキ長18.5尺）

コベリはミヨシ方向を元木にし、木の曲がりによって、釘間1.1尺か1.2尺にする。コベリの釘はカイオリで取り付ける。カイネコは一つたげでカメからトモの方向1.5尺から2尺の間に取り付ける。

ロネコは江の島サッパでは内側につけず、フナバリからトモの方向1.3尺から1.4尺の間にとりつける。コベリの下に化粧板をつけて穴をあけ、ハヤオ（ハヨ）を通す。（図2・参照）

・外装

ロドコ（床）は松を用いるか桧で、腐蝕に強い部材が用いられる。トリカジ側に口ベソをつける。ヤリは使用せず。船化粧として、昔はコールタール、今は青ペンキ、下は赤（ドクチャン）を塗った。

・船具

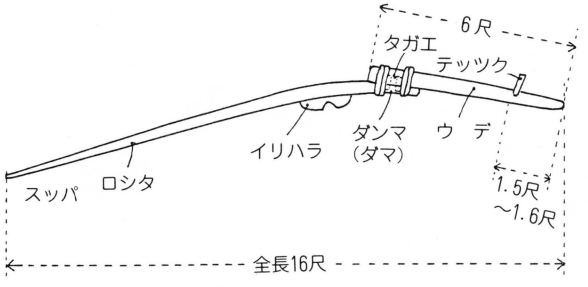
櫓・櫂・舵・アカトリ・竿・カギ・沖箱・綱（オモテとトモに）

① 櫓 ……江島サッパ用

② 櫂

江島で磯物とりにはネリガイが用いられた。沖箱は屋大工がつくり、アカトリは杉材。

◀櫓……江島サッパ
・口の本体…カシ、アヅサ（カシは茨城、岩手からアヅサの櫓がくる）
・ウデ…モミ
・入リハラ…カシやアヅサの木端、ヤマガ
・テッツク…堅木ならなんでもよい
・タガエの結び綱…麻綱がよい、後で針金も用いられた



・一艘の手間と造船場所

手間は一人工で15・16日。昭和45年以降は作業小屋で、独立時代初めは船主の庭を借りてつくる。

・耐用年数

約12年から13年で、雨水にうたれたら、板子をはずして、すぐ塩をかけると長持ちする。

萩浜

㈠ 現在、手漕ぎ船は一艘もない。木造動力船は二艘ある。

㈡ 船大工と接船の造船について

話者　船大工 斉藤正人（大正4・3・25生）

(1) 系譜と修業

後藤豊吉（十八成の伯父）→斉藤清（十八成から独立して萩浜へ）→斉藤正人（兄と20歳下）→守男（甥、死亡）

・修　業

鮎川の高等科卒業から兵隊検査まで、兄の造船所（萩浜）で修業した。兄は五人位の弟子をもっていた棟梁であった。兄から甘い言葉は一度もかけられず、他の弟子と同じようにきびしく技術をしこまれた。

道具箱をかついで新山・泊・寄磯・月浦と兄弟子たちとダンナ殿（船主）の家に宿泊し、庭を借りて注文の船を造った。

軍隊から帰ってから昭和一一年（二二歳）から昭和一五年頃（二七歳）まで、石巻の山西造船所・志津川の高橋造船所・気仙沼の本田鰹漁部・静岡県清水市大万造船と大型船建造の勉学に励んだ。

昭和一七年（二九歳）応召。満州の関東軍、南方のフィリピン、ニューギニア、ジャワ島と転戦し、工兵として船の修理に従事した。

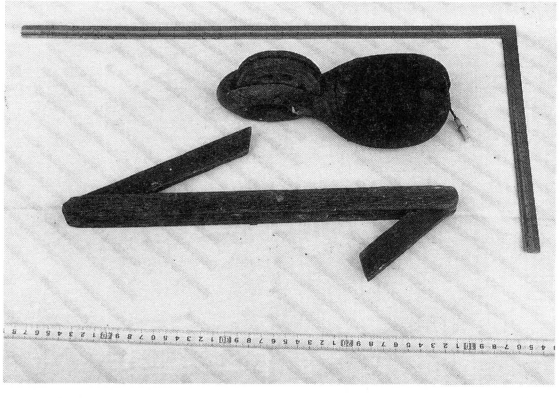
・独　立

戦後、帰国、32歳で独立した。現在まで手漕船・動力船をふくめて一〇〇艘ほどの建造に携わった。造船場は組合の脇の船着場の近くに設けた。

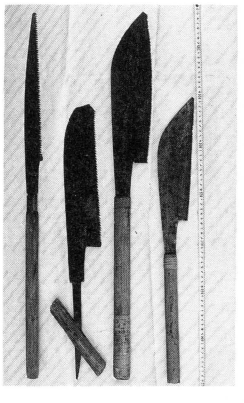
(2) 船大工道具

（写真17～25、参照）

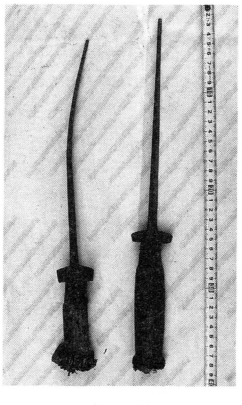
◀写真17　船材を加工する道具
チョウナ　マサカリ



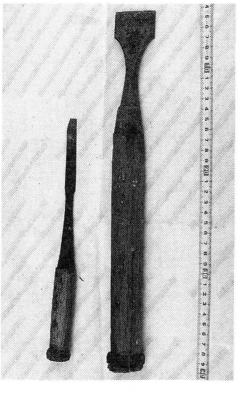
◀写真18　墨つけ用具
上から①曲　金
②スミツボ
③自由金



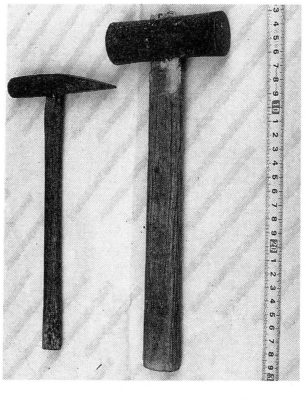
◀写真19
左から①細ノコ…（船材を加工する道具）
・スリ合せ用具
②オオドシ（一番はじめに引く）
③中歯ノコ
④小歯ノコ（仕上げ用）



◀写真20・21
①左…片ツバノミ（穴合せ用）
②右…ツバノミ（クギノミ）
（船釘を打ち込む穴をあけるノミ）



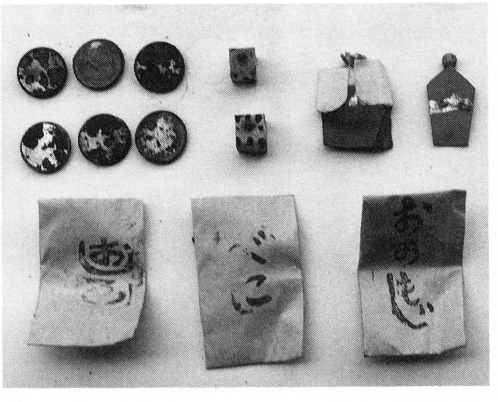
◀写真22　・かしら切り道具
①四分ノミ（②の「ダメキリ」で切ったのをさらに形づくるのみ…オイイレノミ）
②平ノミ（かしら切り「ダメキリ」…船釘の頭がうまる穴を彫る道具）



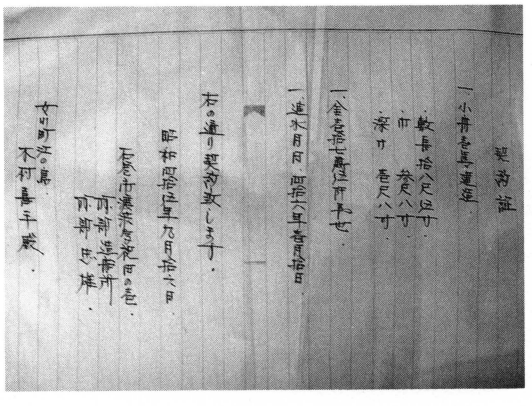
◀写真23
①左…目フリカナヅチ
（写真⑲の細ノコ、オオドシ用）
②右…ゲンノウ（木殺し、釘ジメを打つ）

◀写真24 ・鉋類
左上から①仕上げ鉋
②中す鉋
③荒　鉋（ハギ合せ用）
④マル鉋（円い穴の中をけずる）
⑤ソリ鉋（凸凹がある場合使用）

◀写真25　右の④⑤の背面



◀写真26　お船霊様



契約証

一小井戸長連達
敷長拾八尺四寸
巾　弐尺八寸
深サ　壱尺八寸

一金拾七円也

一連水月円　四拾五月壱日

右の通り契約致します。

昭和四拾五年九月拾六日

石巻市湊字荒町四の壱
所部造船所
所部忠雄

十三町浜の島
不村喜平殿

◀写真27　船の契約書

(3) 造　船

• 用材の調達

戦前は船主にまかせ、伐るのは木挽がする。木挽が山で船板にひく。山からの運搬は山こ二人でかついでくる。

戦後は船大工が製材所前に行って、木の曲がり具合を見て用材を選定し、船板（ケイゴ）にしてもらう。

• 主　材

杉、スキ長二〇尺のタナヅキで、直径、裏で八寸から七寸もの杉の木三本、スキ用材の木は真直な木が良く、ナカダナはまがりの良い木がこのまれ、シキ一本・タナ二本分ということになる。生の荒木どりした船材は早くて3年、半年は乾燥させる。

• 部　材

ミヨシ……欅・桧

床　……松

マツラ（船のろっ骨）……欅

逆　木……ミヨシ・カジ・タツはケヤキで逆木でよいとされている。

• 設計図

杉の板に、実物の10分の1に縮尺されたもので、これを「手板」と言う。

ミヨシを左に折ズミのスキの型取りを記入、船の大きさの基準になるスキ長・幅・深さ・ミヨシ・トダテのヒラキを墨入れする。

• 定式寸法

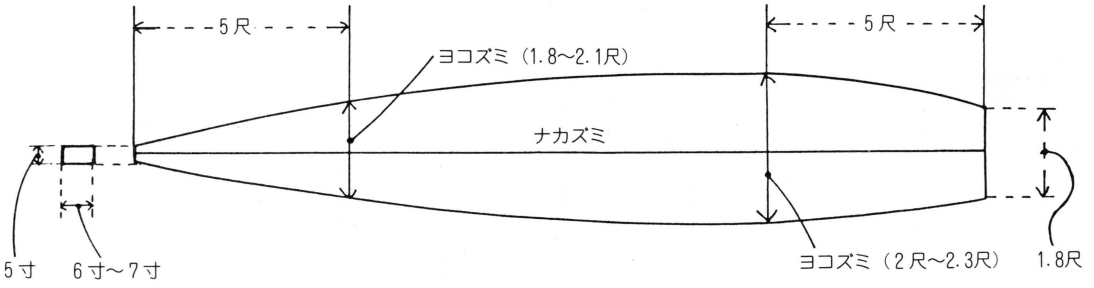
① タナヅキ（二枚棚）の寸法表

注…スキ長20尺・18尺のタナヅキは主として（延）縄ぶち用。スキ長13尺は磯くずり船と称して、鮑漁などに使用した。

◀定式寸法表

シキ長	20尺	18尺	13尺
最大幅	6尺	6尺	4.5尺
深さ（シキからコベリを除く）	2尺	2尺	1.5寸
シキの厚さ	2寸	1.8寸	1.5寸
上棚の厚さ	1.2寸	1寸	1寸
ナカ棚の厚さ	1.2寸	1寸	1寸
トダテの厚さ	2寸	1.8寸	1.5寸
ハリキリ	2寸		
ミヨシのヒラキ	7.5寸	7.5寸	7.5寸
トダテのヒラキ	5寸		

・シキ（スキ）の型どり。

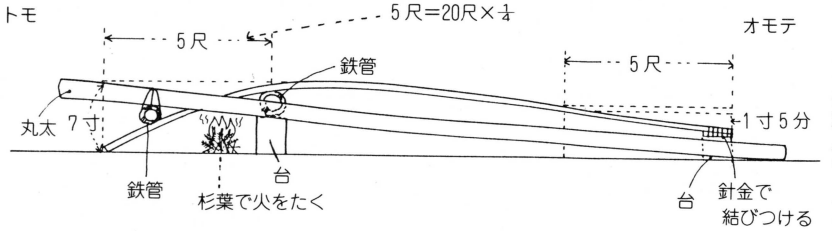


スキ長20尺のタナズキの「シキの型どり」

・接合わせの順序（概略）

① スリ合わせ
　大ドシ→中歯鋸→小歯鋸（仕上げ）
② 木殺し
③ 漆
　弟子の時代（昭和初年）、スリ合わせの合わせ口に漆をぬる。

・シキの焼撓め

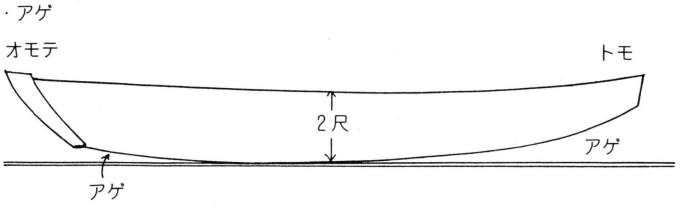


スキ長20尺のタナヅキ

ミヨシの方のスキの上に重い石（60kg位）を積み重ねながら火をかけかけ3時間位たいてためる。1日おく。オモテの方、1寸5分、トモの方5尺に対して7寸ためる。

・シキズエ
バン木の上に、ヤキダメしたシキをあげ、重い石をのせ、下にツッパリをかけ、トダテの方のスキ5寸から6寸反り上げる。それが終わると、ミヨシとトダテのヒラキをヒラキ棒で測り、ミヨシ・トダテをスキ（シキ）に取り付ける。

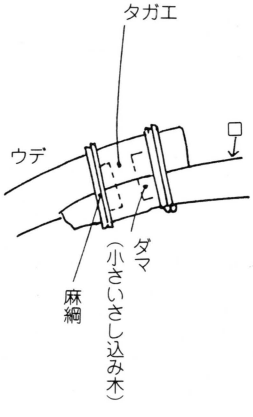
・棚の取り付け
棚板の厚さ1寸をオモテを元木にし、据えられ、シキに当てて型取りする。鉋で仕上げ、釘間5寸にしてシキに取り付ける。二枚棚の場合、前後のヨコズミでヒラキをし、取り付ける。

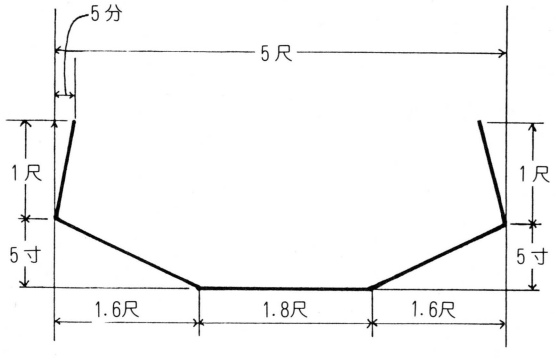


アゲ（反り）は浜によってちがう。荒海は前アゲが高く、荻浜は荒海でないので低い。アゲが表とトモの同じ高さの場合もある。

・船具

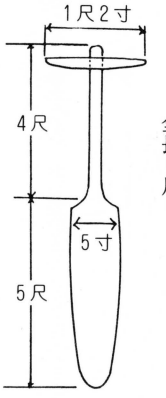
① 櫓
大工は基本の櫓をつくるが「櫓のコゴミ」ー櫓とウデの角度は、各漁師が使い易いようになおす。
タガエのダマと結び綱（麻綱、最近は針金）を調節して使い易い角度にする。





タナのヒラキ（スキ長15尺のタナヅキ）

②
櫂
・ナラ・カシ
・全長9尺



・船おろしの儀礼

夜八時から九時の間に、風呂に入って身を清め、夜半一時頃、ダンケと棟梁が新造船のカメのフナバリに穴をほって、お船霊さま――サイコロ2個・一二文の硬貨・人形ビナ一組――をサイの目にあった祝言を唱え、御神入れをし、御神酒をあげ拝む。

次の日、船のお船霊様に供え物―お供え餅・松の木の重箱・米一升・シトゲ・鰹節・豆・コンブを箸で三つずつあげ、御神酒をあげて拝み、その後、船下しをする。(写真26参照)

※注　天一地六表連裏幸取舵五臓思舵荷押

(三)　萩浜の漁種・漁場と船型

話者…藤原喜和男（昭5・11・12日生）
菅野三代五郎(大5・11・23日生)
斉藤正人(船大工)
(大4・3・25日生)

富貴浦

話者…平塚嘉助(明41・4・15日生)
飯塚善之助(大6・3・2日生)
阿部留治(大1・11・20日生)

・「ドツキ」はくり舟で準構造船である。大正末頃、瀬主が自分の家の山から大木杉丸太を伐り出し、富貴浦

漁場	種類	呼び名・船型・寸法	備考
磯	・あわびとり ・なまことり	「タナヅキ」、2枚棚、スキ丈2～丈3、肩幅（内のり）4尺～4.2尺、深さ1.5尺、1人乗り	カギ、メガネ(箱)、ネリガイ
	・てんぐさ		すもぐりで、テングサカギでとる。
地先沿岸	・カジカ縄（湾から燈台） (旧9月…1ケ月朝うつ 旧10月～12月…日ぐれにかけてうつ)	「タナヅキ」、スキ丈3～丈8 肩幅 { 丈3、丈5……4.5尺 丈8 ……5.0尺 深さ { 丈3……1.5尺　丈8…1.8尺 丈5……1.7～1.8尺 2人～3人乗り	船は船主の注文によって異なる。 昭和30年代で終了（←カキ棚の進出）
	・ナラッパ（鰻とり）一夏	同　上	
	・水晶型定置網	同　上	
	鰯、ぶり、すずき、あじまぐろ（夏）	スキ、丈8～丈20、肩幅5.5～6尺、深さ2尺、ロ、カイ、1人乗り	大型（父の時代）
	・カキツミ	「タナヅキ」、丈20尺～23尺、肩幅6尺、深さ2尺～2.1 or 2尺、ロカギ、1人乗り	昭和30年以降

・和船は斉藤正人の父と正人と月浦の新保大工と侍浜の大工が造船。人のこのみでちがう。

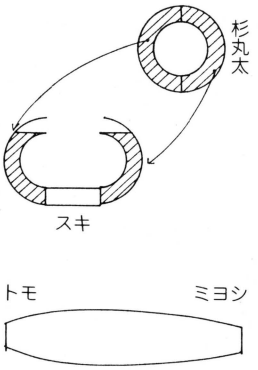
・ロ(櫓)（スキ長 丈3尺←ロの本体 11尺＋ウデ（カシ(九州)／アヅサ(八戸、岩手)）／丈8尺←ロの本体 13尺＋ウデ）

・昭和の初めまで、大型定置の小網……湾に1つ、燈台の沖に1つ、ダンベ船

浜で岩手ケセンの大工が来て約一ヶ月かけて造った。

- 話者平塚嘉助（明41・4・15日生）
  …侍浜の船大工杉浦勇吉の祖父に萩浜小田浜で造ってもらう。また斉藤正人（地元萩浜）・大原のシナヲ大工（一回）にも手漕ぎ船を造ってもらう…計五艘。

くり船「ドッキ」



- 話者阿部留治（大1・11・20日生）
  …祖父が生きていた頃、十八成の大工カオル大工に造ってもらう。
- 萩浜の船揚場は小田浜で、船の修理も、船大工を呼んでしてもらった。浄化・乾燥・外装（虫よけのコールタール塗）もした。フナタテ（虫や草の浄化→青杉葉でゆぶすーもした。
- マンナオシ…不漁の時、船を浜に曳きあげて、法印さまに拝んでもらった。
- アンバサマ…安波さまの掛け軸あり。秋葉山、金比羅山の石碑のある一区画をアンバサマと称して、大漁祈願の場としている。

漁場	種類	呼び名・船型・寸法	備考
磯	ふ　女、手……ボート（ナカダナ、タナヅキ） 1 いそのり の……でとる 2 ひ……鎌を使用 3 じき わ か め……鎌に竿をつける 4 5 てんぐさ……女……てんぐさカギ 6 7 8 9 たこ……竿と石ヤリ…… 10 あわび あ……カギに竿 11 12 なまこ……サデ（ガラス箱を使用）2人乗り、丈1～丈3 ロシキ網を曳く ―「ナカダナ」、スキ20尺、肩幅5尺、深さ2.5尺、1人乗り	スキ丈1～丈3 肩幅4～4.5尺 深さ2尺 1人乗り …2人乗り	小さい船はすべてボートとよぶ。イッカイダナ使用しない。 春はアサリ（カキ養殖でとらなくなる） イシヤリでも深い所は丈3～丈5を使用。
地先沿岸	・水晶型定置網　杭…5本立と7本立 ・ロク地曳網1日5月 ・鰮（いわし）地曳網 ・大網（小竹、狐崎の場所借用	「ナカダナ」、スキ丈3～丈8　家によって2～3人乗り 「タナヅキ」、スキ25尺、1艘でまく 高船…「ドッキ」、くり船、スキ30尺、肩幅6尺、深さ2尺 筒合…「ダンベ」 沖ノ見（目）…「ドッキ」「ダンベ」	10か統 昭和のはじめまで ↓ ロ4丁 カイ6丁 12人乗り
沖合	ウケグリ ↓ 旧3月 旧5月 は　も（延縄） 筒　（田代沖） た　ら　縄（旧11月～2月） （田代、長渡、荻浜沖）	「ナカダナ」、スキ長23尺、肩幅6尺　深さ2.5尺、2～3人 同　上（兼用） 同　上	ウケグリでシャコエビをとる ↓←切り換え

鹿　立

話者…平塚賢蔵（昭8・5・25日生）

(一) 使用手漕ぎ船

地方名…「カッコ」（和船）

船　型…二枚棚

造船年月…昭和二十年五月十五日

船大工…牡鹿郡小網倉清水田浜　橋本義松

主　材…杉

造船日数…14日位

別　材　…ミヨシ→ケヤキ。

ロッコツ（マツラ）→松

船バリ→桧。

コベリ→クヌギ

スミレ→クヌギ。

寸法

シキ長　…18尺5寸

シキの厚さ…2寸

船　幅　…5尺

トダテの厚さ…2寸

ミヨシのヒラキ…8寸。

タナの厚さ…1.2寸

トダテのヒラキ…ミヨシより立っている。

乗　員…二人。

漕　法…定置網は一櫂、一丁櫓、はも筒は二丁櫓使用漁種

…定置網（水晶型）。

地先より80間どろの水底。

はも筒漁…田代沖

船　間…ナマ・カメ・ヤカテ・トモの間

櫓　…友櫓・ワキ櫓・向かい(ゆ)櫓

各部の名称〔カンヌキ・コベリ・トコ／トダテ・上タナ・中タナ

・舵は帆を立てた場合使用。

(二) 鹿立の漁種・漁場と船型

漁場	漁の種類	呼び名・船型・寸法	備考
磯	鮑	スモグリ	(少ない)
	つぶ		(多い)
	なまこ（こしき網）	「カッコ」、タナヅキ、スキ18.5尺、幅5尺	(昔)
	ひじき		
	のり		
	ふのり		
	まつも		(少々)
地先沿岸	・水晶型定置網（鳥島瀬沖合80間）	「カッコ」、タナヅキ、スキ長18.5尺、幅5尺、2人乗り、1櫂、1丁櫓	3軒で1把を交代で操業
	・雑縄（根縄）	同　上（兼用）	
	・はも筒延縄 新5月末 ↓ 8月	同　上	
沖合	・はも筒（キミガネ沖）	同上	・鰹漁 大正初年頃納屋で加工し節にして北前船がケセン地方から塩釜港にはこぶ。
	・鰹漁（金華山沖）	八丁口（凝餌釣具ツノを利用した一本釣）	

・フナタテ…満潮時を利用して船揚場にコロで曳いて揚げ、船底についたフナクイムシを藁(わら)や杉葉でもやしゆぶして駆除した。船の耐用年数12～13年。

・一階棚をサッパと呼び、棚ツキ（二階棚を「カッコ」と称した。棚を1.2寸より厚くすると、長持ちはするが重い。祝田の阿部忠雄大工にも一艘注文する。

(三) 現有の手漕船なし。

狐崎浜

話者…平塚忠兵衛（大正15・1・15生）

(一) 手漕船は現存しない。10年前なくなる。

(二) 漁種漁場と船型

漁場	漁の種類	呼び名・船型・寸法	備考
磯	鮑	「サッパ」「タナヅキ」、スキ長丈3、肩幅4尺～5尺、深さ1.5尺、1人乗り	箱メガネ、カギ、ねりガイあやつりとる。
	なまこ	サデ(カギ)……同　上 こひき網……「タナヅキ」、スキ長丈8　肩幅6尺	特定の人の入札。ロで漕いで網を曳き、丈8のタナヅキで大網から鰮(いわし)を買ってイワシ釜でにしめシメドでしめて乾燥し町に売った。
	まるこ（貝）	磯でナサシで女がとる。かれい縄のかれいの餌	
	春 ふのり(手)	女性	
	わかめ、ひじき	鎌でいそでとる	
	夏 てんぐさ	すもぐりで手でとり、スカリに入れる水中メガネで観て	
	まつも	いそで手でとる	
	冬 のり	鮑のカラでむしりとる	
	ガゼ	「サッパ」「タナヅキ」、スキ丈3、1人乗り	カゼサデでとる
地先沿岸	大網（るか統）	筒合船「ダンベ」スキ33～32尺、ロ2～3、カイ6（7・8人） 高　船「ダンベ」スキ30尺、ロ2～3丁、カイ6（5・6人） 沖ノ目「ダンベ」スキ30～27.8尺、ロ2～3丁、カイ4（5・6人）	キ（岸）、ナカ網、三丁目の三か統
	水晶型定置網（5か統）	「タナヅキ」、肩幅5～6尺、丈8～20尺、深さ2.5寸、2人乗り　→兼用	小ざかな、鰯が入る
	かれい延縄（地先から100～200間とぶ）	同　上（2人乗り）	べた縄、ウキなし、縄をかけると落ちるので20分位であげる。1日2・3回
	小縄、かれい刺網（地先の砂地と泥地との境－シロ境）	同　上（兼用）2人乗り、刺網は3人	冬至10日前地先10間位のシロ境に産卵にくる（城）
沖合	はも筒（延縄式）（7・8月） ↓ 田代三つ石沖 ↓ たら縄（11月～2月）	スキ丈8～20尺、帆掛 ↓ 兼用、ロ2～3丁、カイ使用せず、帆掛	筒は竹で自製（市吉の）（口前はスズ竹、カラ竹、真竹）（縦）（横）

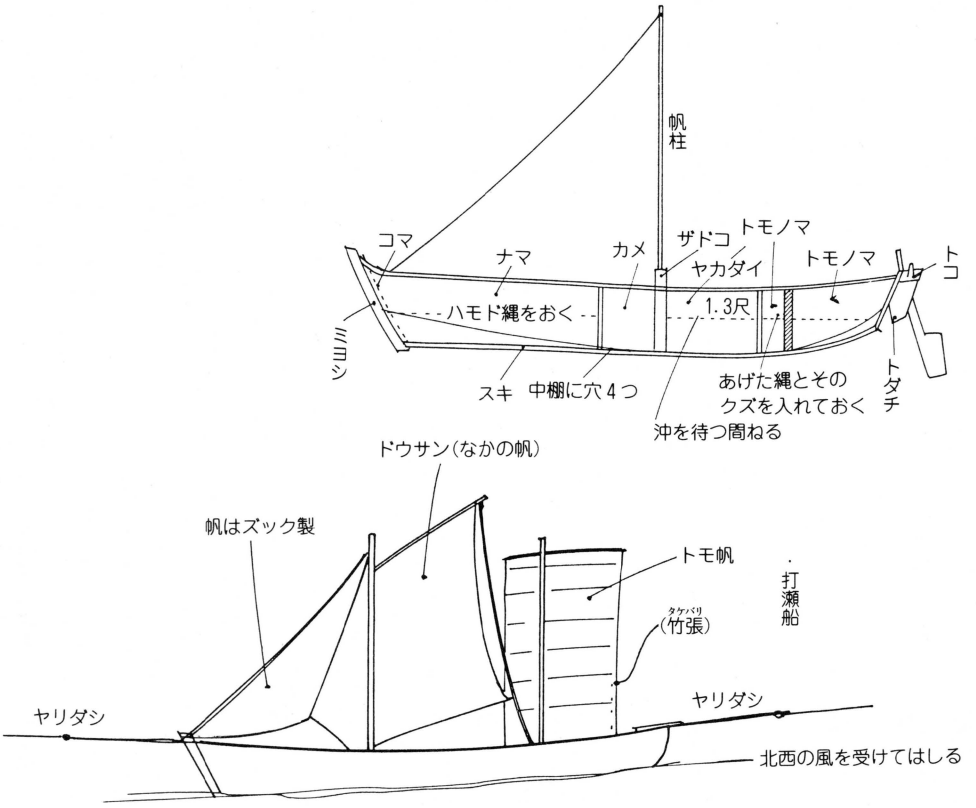
• フナタテ…新造船が、一番、ニラと言う虫にやられるので、船を前の浜の船揚場に引きあげ、干潮時、船底をカヤなどをたいてゆぶし駆除する。修理は萩浜の斉藤正人大工の兄、清に頼んだ。

竹の浜
(一) 現存の手漕船はない
(二) 漁種・漁場と船型

話者…平塚道雄（明44・2・11生）
阿部力治（明44・4・15生）
後藤昭寿（昭3・11・10生）

漁場	漁の種類	呼び名・船型・寸法	備考
磯	なまこ(こしき網)（冬場）	「タナヅキ」、スキ長22尺、肩幅5.2～5.5尺(5.6)、深さ3尺（家によって1,2寸ちがう）	こしき網をロで曳く 境目 石 砂地
	鮑	「サッパ」「タナヅキ」、スキ長丈物（「イソサガシブネ」）	権利を他浜にゆずる
	ふのり(旧2月)	女性がとる	
	ひじき(旧2月)	食う位しかとれない	
	わかめ(旧3～4月)	いそで鎌でとり、かごに入れた(女性)	
地先沿岸	・はも筒（延縄） 夏…湾内→田代沖…旧10月20日えびすこまで	「タナヅキ」、スキ長22尺帆掛	
	・かれい刺網 └→これで正月をした。 桂島付近「冬至10日前」城境に産卵に来る。	(昭和13～20年)「タナヅキ」22尺（シキ） ロ3丁、2丁 網はあさ網（太目がれいは網目5寸2分～5寸8分、中古品を七ケ浜やユリアゲ、荒浜より買う。	・巡航船にまに合うように朝1時～2時に起きて漁をしたので「ツラアラズ、シヨバイ」と言った(洗顔できないほど忙しい)
	・水晶型定置網 桂島付近他（11か統）9月節句きり上げ	「タナヅキ」スキ18尺～20尺（1人乗り）	ねう、青、たら、いわし、すずき
沖合	打瀬(うたせ)網 (石巻湾→田代沖→福島沖)　冬期	「ミカワセン」 「ウタセ」スキ長（40尺以上）65尺？ズック帆(角帆)が主体、ロ2丁、カイない、4人乗り、「シオ」では入らない「シオ」とはジャリ、砂の場所	明治～大正の打瀬船 かれい、ひらめ ・玉木造船所 ・七ケ浜のキンポ大工が3～4人が3～4ケ月かけてここで造る
	・もうか縄		
地先沿岸	・大謀網 (三丁目、根葉地目)	「ダンベ」スキ　肩幅1丈 「ドッキ」スキ30尺肩幅7～8尺	大正で終り

・「タナヅキ」（スキ長一二尺）



・使用した手漕船。（タナヅキ型）

項目＼所有者	山口源蔵（大正10.1.1）	佐藤保雄（大正9.2.20）
地方名		ワセンコ
シキ長	18.5尺	15尺
船幅	5尺	4.5尺
深さ		2尺
造船月日	昭和18年頃	昭和21年頃（15年使用）
船大工	月浦 新保大工	十八成 後藤 広
分布		牡鹿半島一帯
乗員	2人	2人
漕法	2丁櫓	2丁櫓
使用漁種	ハモ筒 ウチグリ（しゃこ） コシキ網（なまこ）	同　左
主材		杉
石数		
造船日数		シキ長1尺 1人（15日）
別材		ミヨシ（欅） 床（松） マツラ（松）
シキの厚さ	2寸5分	2寸5分
タナの厚さ	1寸2分	1寸2分
トダテの厚さ	2寸5分	2寸5分
ミヨシのヒラキ		
トダテのヒラキ		

(一) 牧浜

(二) 現存の手漕船なし。

漁種・漁場と船型

漁場	漁の種類	呼び名・船型・寸法
磯	てんぐさ（すきぐり） 鮑（入札制）	「和船（ワセン）」、スキ丈5、ロ15尺、1～2人乗り 「サッパ」、スキ「丈物」（1丈）
地先沿岸	うけぐり（シャコエビ） ㊂ ↓ はも筒縄 ㊄ ↓ なまこ（こしき網） ㊆	「和船」（タナツギ） スキ丈5 肩幅4.5～5尺 深さ2尺、1人乗り 同　上 1人乗り ロこぎ→15尺 同　上 1人乗り ロこぎ→15尺
	大網 天保網 ババ網（小網）	ダンベ船、シキ30尺（明治～大正末）

話者…佐藤保雄（大正9年2月8日生）

田代島の仁科田浜

(一) 現存…大網船「ダンベ」（大仲）…一艘。岩手県三陸町越喜来道下漁業部所有。昭和四〇年頃、田代漁協でプラスチックでおう（玉木造船所にて）、その後、道下漁業部に譲渡して漁業部で現在使用中　（調査手漕ぎ船8参照）

(二) 漁種・漁法と船型

話者…小谷清夫（大正10・2・18生）
遠藤与四郎（大正2・3・10生）
尾形彦夫（大正15・10・25生）

漁場	漁種	呼び名・船型・寸法	備考
磯	鮑	「フネッコ」（1枚棚、2枚棚） スキ長1丈～丈3、肩幅4尺、2櫂 深さ1.2尺～3尺、2～3人乗り 「カッコ」…昭和初年まで （くり船の準構造船）	オモテ…「かい」 トモ…「かじしかい」 水底の深さ…3尋～4尋以上　（竿2本つなぐ）
	わかめ	同上船（カギと鎌）	
	ひじき	〃　（鎌でとる）	竿に鎌をつけてとる
	ほや	〃　（「ホヤカギ」とる）	昭和30年頃
地先沿岸	延縄	同　上	
	大網のある付近	櫓・櫂1丁（たまに2丁）	
	1月		
	2	カレイ	
	3		
	4		
	5	タ	
	6		
	7	ハモ	
	8	ラ	
	9		
	10	タコ	いわし、すずき、雑魚
	11	ドンコ	
	12		
	・水晶型定置網	同　上	よその人…鮎川の阿部 塩釜のハガ、岩手の山根 ……個人経営
	・大謀網	「ダンベ、スキ30尺」	

・沖合は動力船使用　・調査時…昭和10年代～20年代

田代島大泊浜

一　現存手漕船なし。

注…田代漁協で61年頃、玉木造船所に、プラスチックでおったダンベ（沖の目）（大網用）を譲渡、現在、北上川に係留。

二　漁種・漁場と船型

話者…津田佐男（大正元年・8・20生）
久保栄一（大正13・3・4生）

・大船造船の系譜

杉浦利惣兵衛―杉浦啓太郎（祝田）
斉藤清―正人（萩浜）
遠藤四三男（田代）

漁場	漁種	呼び名・船型・寸法	備考
磯	3 ふのり		ふのりは縄張りがあった田の無い人は海草で生活した。 ふのり……4ケ月 ひじき……3ケ月 わかめ……2ケ月 てんぐさ…1ケ月 岩のり……2ケ月 で食べて行くに良い （生活出来た）
	4 ひじき		
	5 わかめ…	…「フネッコ」タナヅキ （「ベカコ」大網の岩手言葉） スキの長さ16～18尺、肩幅5尺、 深さ2.3尺、2人乗り、ロ、カイ1丁	
	6		
	7 つのまた		
	8 てんぐさ		
	9		
	10 岩のり	「フネッコ」タナヅキ→1階棚 わかめと同じ船	タナヅキの前はカッコ、網地からくる。カッコは準構造船、くり船
	11	・素手「スモグリ」でヤスカリに入れ浮上して船に入れる。船は同上	・カギは渡波、谷川のカジヤから買う。
	12	・「三本かぎ」大正初の船は上と同じ	
	1		
	2		
	鮑（三っ石） ほや（7月～8月） なまこ（11月～3月） たこ（10月～1月）	・同上の船、2人乗り、たもで4尋～5尋いるのをすくう ・イシヤリ使用、同上の船、ロで2人乗り	
地先沿岸	・延縄	「ふね」2階棚、スキ長25尺、幅7～8尺 ロ3丁、カイ1丁	
	4 かれい		
	5		
	6 ねう	渡波の打瀬でとったしゃこをねうの餌にする。	
	7		
	8 どんこ		
	9		
	10 はも		
	11		・たら縄を「ナガ（長）縄」と言う 50棚打って生活した。
	12 まだら（たら）		
	1		
	2		
	3		
	・大謀網	筒合「ダンベ」、シキ長31尺 高船「ドッキ」→「ダンベ」 沖ノ目ノシキ長30～27尺	昭和10年以後
沖合	鰹漁（長渡し沖）	「八丁ロ」	（明治中頃まで）

小竹浜

(一) 現存手漕船　調査時（七月中旬）で六艘であったが現在、そのうち二艘廃棄（11月）、現在四艘のみとなる（調査表一～六参照）

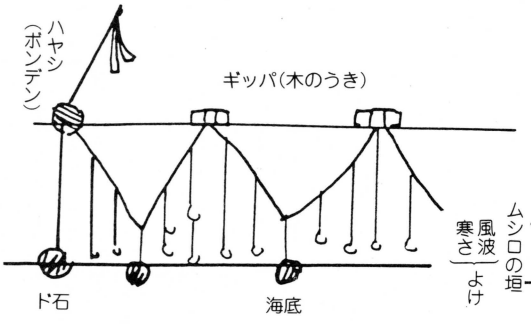
(二) 漁種・漁場と船型

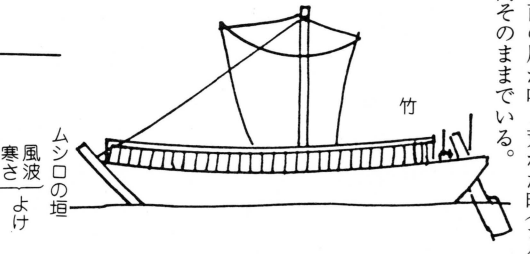
話者…阿部福治（大正5・1・2生）
阿部　正（大正4・12・29生）
阿部欣一（大正12・7・23生）

漁場	漁種	呼び名・船型・寸法	備考
磯	鮑 （3～4人入札 年中休みなくとる） 1 いそのり…… 2 3 わかめ、ひじき 4 まつも、 5 つのまた 6 ほや 7 8 9 10 11 12	「イッケダナ」タナヅキなし スキ丈、丈物、深さ1.2～1.5尺 幅4～4.5尺、1人乗り …足に「ワラジ」をはき、女、あわび貝でけずりとる。 →「イッケダナ」鮑と同じ船 乗員　男と女の共同 「イッケダナ」は1軒で1艘はあった。	昭和40年から「タナヅキ」になる。 阿部金太郎大工つくる。 ・ほやはひまな人が適宜とる。
地先沿岸	・大網 キシ、ナカ、オキの （3か統） ・水晶型定置網 （7～8統） ・タコ旧10月 …11月、12月 ・ウケグリ （手操）	「ダンベ」、すき長？ 「ドウブネ」　4丁ロ、櫂10丁 スキ長20尺「タナヅキ」 肩幅5.2尺、深さ2.5～3.6寸 「イッケコ」スキ丈物 （カメ）（イシヤリ）（ツツキ） 「タナヅキ」 スキ長丈5～丈6 肩幅4.5尺、深さ2尺 「タナヅキ」スキ長丈5～丈6 タコの「カメ」用と同じ	昭和10年代 最盛期 ケセンから船頭がくる。 カメは少し沖になる。 シャコエビ カレイ

漁場	漁種	船
地先沿岸	・延縄 1 2 カレイ 3 4 5 6 7 8 ハモ縄 9 10 11 小縄 よだ縄 12	「タナヅキ」 ・スキ長 丈5～丈6 ・肩幅 4.5尺 ・深さ　2尺 ・ロ　2丁 ・カイ　1丁 大たら →弁天島の沖

・沖合はめのけ縄とカツオ漁であるが皆動力である（話者の時代）





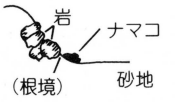
・よだ縄とその船
冬の北西の風が吹き荒れた時（シケ）は一週間そのままでいる。

・金比羅様のお札がどこの家にもある。

(一) 佐須の浜
現存している船2艘、現在使用していない。一艘は寄付（調査カード7参照）

(二) 漁種・漁場・漁法と船型
・祖父の時代、メノケ延縄（金華山）をやる

(三)の話者…須田与一郎（昭4・2・16生）
須田　新蔵（大15・11・5生）
須田栄治郎（大13・2・28生）
雁部　鉄雄（大15・7・4生）

漁場	漁種	呼び名・船型・寸法	備考
磯	・鮑 ネリガイを後に漕いで箱メガネをのぞいてカギ引っかけてあげる。 ・なまこ タモですくう 1 ひじき 岩のり 2 ひじき 3 くさのり 4 くさのり わかめ 5 わかめ 6 てんぐさ 7 てんぐさ	草刈り鎌、デバ包丁でとる 手でとる ひじきのりと称して海草につくのりで手でとる 「口開」3日後は「ツラシ」＝自由採取 竿の先に鎌をつけ「イッケッコ」に2人（1戸）のってとる 大人・子供も眼鏡をかけスモグリして手でとる。6月1日「口開け」以後は「ツラシ」又「イッケッコ」にのって「テングサカギ」でとる	「カギ」の長さは竿も入る 春（5～6尺） 秋（15尺） 冬（20尺）  「テン草カギ」は渡波の本田カジヤで作る
地先沿岸	1 2 3 ②ウケグリ 4 ①オキグリ ②ウケグリ 5 ①オキグリ 6 ①オキグリ ③ハモ縄 7 ①オキグリ ③ハモ縄 ④イシモチ・すずき縄 8 ①オキグリ ④イシモチ・すずき縄 9 ①オキグリ ④イシモチ・すずき縄 ⑤イワシオトシ定置網 10 ④イシモチ・すずき縄 ⑤イワシオトシ定置網 11 ⑤イワシオトシ定置網 12 ⑤イワシオトシ定置網	①「タナヅキ」スキ長30尺以上、ロ6丁、帆走、カイなし、ミヨシがトダテより3尺～4尺でている。ナレ風吹く頃やめる。 ②「タナヅキ」スキ21尺で、後でスキ18尺 ③「タナヅキ」スキ長20～21尺（昔） ④同上2丁ロ、1カイ、2～3人乗り 肩幅4.8～5尺、深さ2.5尺 ⑤「タナヅキ」スキ長21尺、岸の方はハシゴ定置網 えびす講まで	①は金華山近海ひらめ、かれいを曳く ②はシャコエビ、赤カジカを曳く

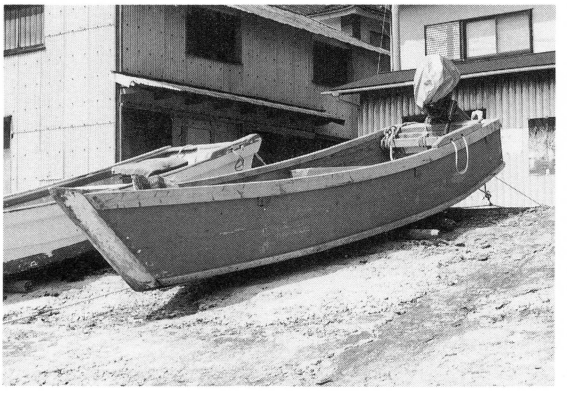
四　調査結果から

(一) 調査時（七月）の現存手漕船は小竹六艘（磯船）、佐須一艘（磯船）、田代島仁斗田1艘（ダンベ船（大網用）の八艘のみであった。そのうち小竹の二艘は一一月に船揚場の整理のため廃棄処分された。処分船の中に市に寄付、収集許可ものが一艘あった。このように浜の伝統的和船であり、文化財である民具が急速に廃棄の運命にあるので、市で緊急に保存、確保する場所を設定すべきである。

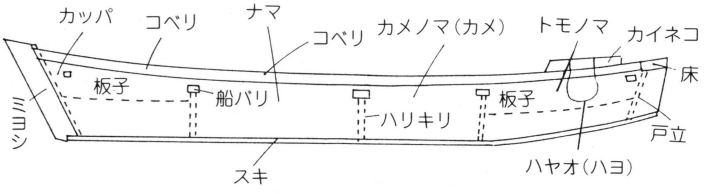
(二) 船の呼び名は各浜で若干ちがっている。一枚棚の磯船を佐須・小竹ではイケッコ、佐須ではスキ長丈以下の小舟をチョロコとも呼び、田代島はフネッコ、富貴浦ではボート、江ノ島ではサッパと呼んでいる。呼び名と船型は必ずしも一致しない。普通、二枚棚磯船をタナヅキと呼んでいるが牧浜、月浦ではワセンコ、鹿立ではカッコと呼んでいる。カッコは昔はくり舟の準構造船で構造船接船（はぎぶね）と船型がちがう。

ミヨシ・トダテのヒラキも女川町江ノ島のサッパのミヨシのヒラキ（斜角）は一尺に対して七寸であるのに対し萩浜では七・五寸と斜角が多く、シキの上げ（反り）も波静かな牡鹿半島の表浜萩浜で低く、荒海は高い。同じ牡鹿半島でも表浜と裏浜、各漁浦の漁場の自然条件に応じて、船型に微妙な差異が見られた。

調査地　石巻市小竹浜
本船種の地方名　「イッケッコ」
「イッケダナ」
所有者　岩崎民一
電話　九七―四〇五九
寸法　シキ長…三二三㎝、
船幅…一一二㎝、深さ…三三㎝
船大工　阿部忠雄
師匠の住所　石巻市祝田浜字祝田一～六九―一三(父が師匠)
本船種の分布範囲
牡鹿半島の裏浜(祝田→東浜方面)
何人乗り　一人乗り
漕法　漁の時は櫂のみ操作、船外機一、櫂一(昔は櫓一、櫂一)
使用漁種　磯物(鮑、わかめ、ほや漁)


No. 1

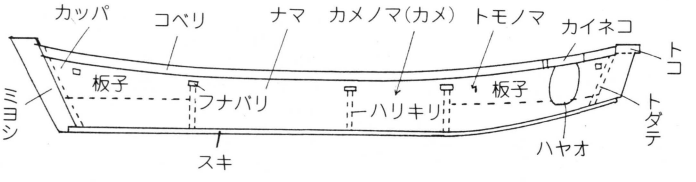
漁場の自然条件　浜の前方(南)にある弁天島や生草島の磯や沿岸
調査者　鈴木東行
年月日　平成二年七月二四日
主材　杉、**石数**　三石
造船日数　一人で一五日
別材(使用部位)　ミヨシ…ケヤキ、フナバリ…檜、床…松
シキの厚さ　一・五寸(四・六㎝)
トタデの厚さ　一・五寸(四・六㎝)
ミヨシのヒラキ(角度)　七寸
トタデのヒラキ　六寸



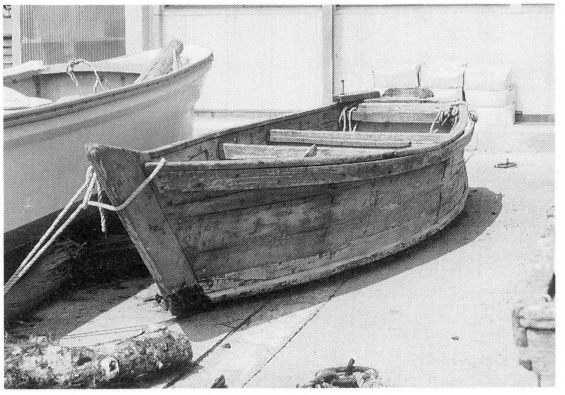
調査地　石巻市小竹浜
本船種の地方名　「イッケッコ」
「イッケダナ」
所有者　後藤久二郎
電話　九七―四〇三八
寸法　シキ長…三三七㎝、船幅…一一八㎝、深さ…三四㎝
船大工　阿部忠雄
師匠の住所
石巻市祝田浜字祝田一～六九―一三
本船種の分布範囲　(祝田浜、佐須浜、小竹浜、折浜)→東浜の各浜
何人乗り　一人乗り
漕法　漁の時は櫂使用、船外機一、櫂一(以前は櫓、櫂)
使用漁種　磯漁(鮑、ほや、わかめ)

No. 2

漁場の自然条件
浜の前の弁天島や生草島沿岸
調査者　鈴木東行
年月日　平成二年七月二四日
主材　杉、**石数**　三石
造船日数　一人で一五日
シキの厚さ　一・五寸
トタデの厚さ　一・五寸
ミヨシのヒラキ(角度)　七寸
トタデのヒラキ　六寸

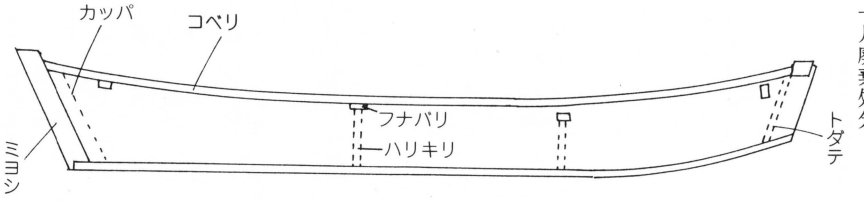


調査地　石巻市小竹浜
本船種の地方名　「イッケッコ」「イッケダナ」
所有者　佐々木　芳　雄
電　話　九七―四〇四三
寸　法　シキ長…三三六cm、船幅…一二二cm、深さ…三六cm
船大工　佐　藤　大　工
師匠の住所　祝田
本船種の分布範囲　小竹浜から東浜方面
何人乗り　一人乗り
漕　法　磯漁のときは櫂をあやつり、漁場への往復は船外機
使用漁種　磯物(鮑、ほや、わかめ)
漁場の自然条件　弁天島や生草島沿岸
調査者　鈴　木　東　行

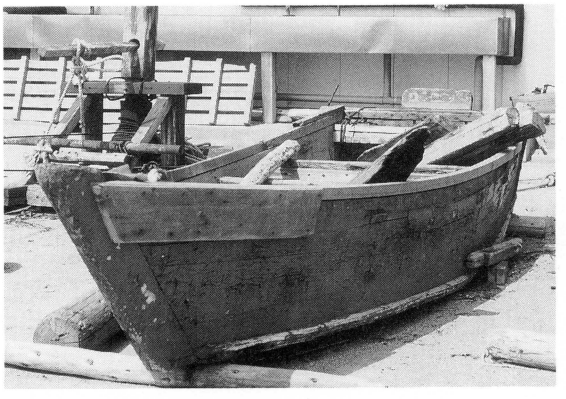


No. 3

年月日　平成二年七月二四日
主材　杉、**石数**　三石
造船日数　一人で一五日
別材(使用部位)　ミヨシ…ケヤキ、フナバリ…檜、床…松
シキの厚さ　一・五寸
トタデの厚さ　一・五寸
平成二年十一月廃棄処分

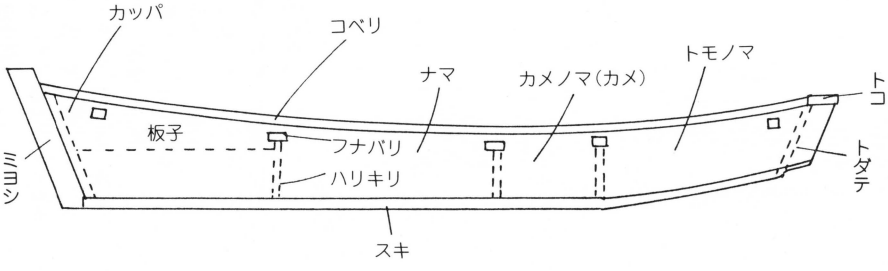


調査地　石巻市小竹浜
本船種の地方名　「イッケコ」
所有者　小　川　悦　男
電　話　九七―四〇六一
寸　法　シキ長…三一七cm、船幅…一一一cm、深さ…三〇・九cm
船大工　阿　部　金太郎
師匠の住所　小竹浜
本船種の分布範囲　小竹浜から東浜方面まで
何人乗り　一人乗り
漕　法　櫓一、櫂一丁。磯漁のときは櫂であやつる
使用漁種　磯物(鮑、ほや、わかめ)
漁場の自然条件　弁天島・生草島の沿岸
調査者　鈴　木　東　行



No. 4

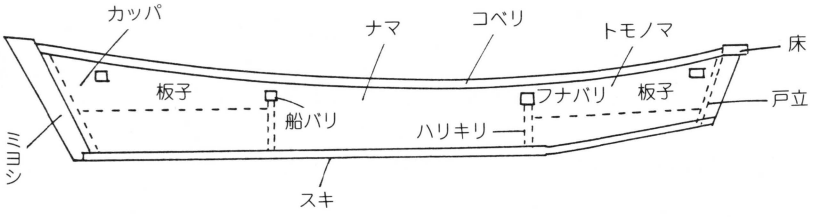
年月日　平成二年七月二四日
主材　杉、**石数**　三石
造船日数　一人で一五日
シキの厚さ　一・五寸
トタデの厚さ　一・五寸
平成二年十一月廃棄処分



調査地　石巻市小竹浜
本船種の地方名　「イッケッコ」「イッケダナ」
所有者　阿部庄一郎
電話　九七―四一二一
寸法　シキ長…三一五cm、船幅…一一二cm、深さ…三〇・〇cm
船大工　阿部忠雄
師匠の住所　石巻市祝田浜字祝田一～六九―一三
本船種の分布範囲　祝田・佐須浜より東浜まで
何人乗り　一人乗り
漕法　櫓一丁、櫂一丁、磯漁の時は櫂であやつる
使用漁種　磯物（鮑、ほや、わかめ）

No. 5

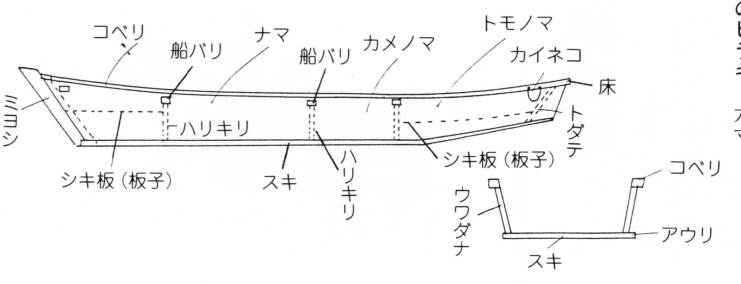
漁場の自然条件　弁天島や生草島沿岸
調査者　鈴木東行
年月日　平成二年七月二四日
主材　杉、**石数**　三石
造船日数　一人で一五日
シキの厚さ　一・五寸
トタデの厚さ　一・五寸



調査地　石巻市小竹浜
本船種の地方名　「イッケッコ」「イッケダナ」
所有者　佐々木義雄
電話　九七―四〇四八
寸法　シキ長…三三三cm、船幅…一一三cm、深さ…三三・三cm
船大工　阿部忠雄
師匠の住所　石巻市祝田字祝田一―六九―一三
本船種の分布範囲　牡鹿半島の祝田、佐須、小竹、折浜
何人乗り　一人乗り
漕法　漁の時は櫂であやつる。船外機一、櫂一（前は櫓と櫂）
使用漁種　磯物（鮑、わかめ、ほや）

No. 6

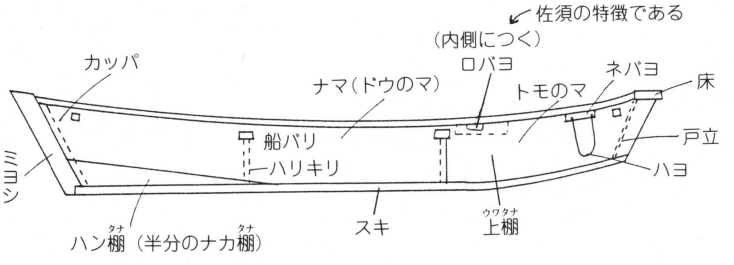
漁場の自然条件　浜の前にある弁天島や生草島沿岸
調査者　鈴木東行
年月日　平成二年七月二四日
主材　杉、**石数**　三～四石
造船日数　一人で一五日
別材（使用部位）　ミヨシ…ケヤキ、フナバリ…檜、床…松
シキの厚さ　一・五寸
トタデの厚さ　一・五寸
ミヨシのヒラキ（角度）　七寸
トタデのヒラキ　六寸



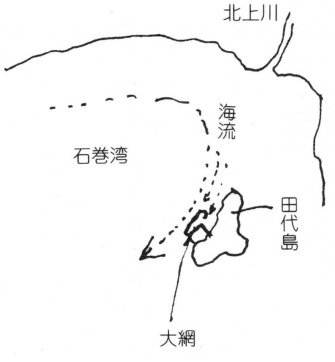
調査地　石巻市佐須浜
本船種の地方名　「イッケコ」
「イッケダナ」「ハンタナ」ナカダナが半分しかない
所有者　須田与一郎
電話　二四―一九一六
寸法　シキ長…三〇三cm、船幅…一〇六cm、深さ…三六cm
造船年月
昭和五〇年頃(須田亀治から買う)
船大工　須田円吉
師匠の住所　祝田
本船種の分布範囲
ここ独自の船で、小竹浜では幅が大きくなる(荒場だから)
何人乗り　一人乗り
漕法　沖へは櫓でこぎ、磯では櫂であやつる
使用漁種　磯物(なまこ、鮑、うに)
漁場の自然条件
尾崎あたりまでの地先沿岸

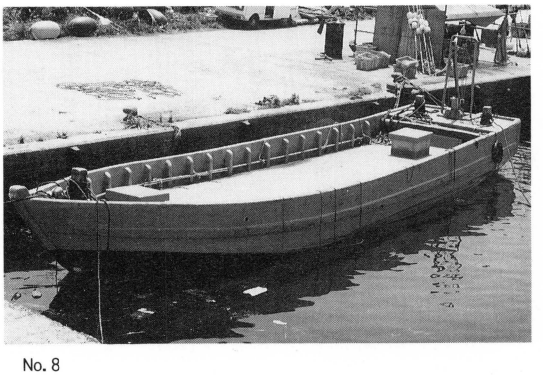
No. 7

調査者　鈴木東行
年月日　平成二年七月二五日
主材　杉、**石数**　三石
造船日数　一人で一五日
別材(使用部位)　ミヨシ…ケヤキ、床…ケヤキ
シキの厚さ　一寸一分
タナの厚さ　八分
トタデの厚さ　一寸一分
ミヨシのヒラキ(角度)　五寸
トタデのヒラキ　三寸



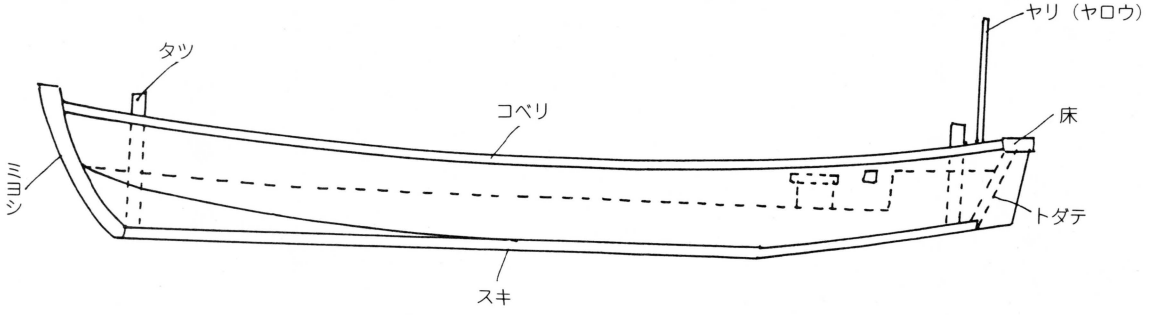
調査地　石巻市田代浜仁斗田
本船種の地方名　「ダンベ」「ドウブネ」
(岩手県では「オオナカ」)
所有者　岩手県三陸町越喜来道下漁業部
寸法　シキ長…一〇m、船幅…三m五〇cm、深さ…九四cm
造船年月　昭和三〇年代(四〇年頃玉木造船所でプラスチックをかける)
本船種の分布範囲　牡鹿半島各浜
何人乗り　現在三人～四人、三〇年代一五～一六人
漕法　現在動力船曳航、昔櫓二丁(一丁に二人で)櫂6丁
使用漁種　大型定置網(落し網)マグロ、イワシ、ブリ、鯛
漁場の自然条件　田代島西岸
・田代漁協が道下漁業部にゆずる。
・この型のダンベ(プラスチックで外側をおおう)は玉木造船所で所有、現在、北上川に系留(田代漁協から譲渡)
調査者　鈴木東行
年月日　平成二年七月一七日



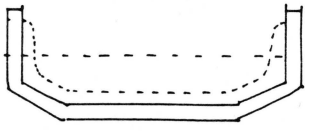

No. 8

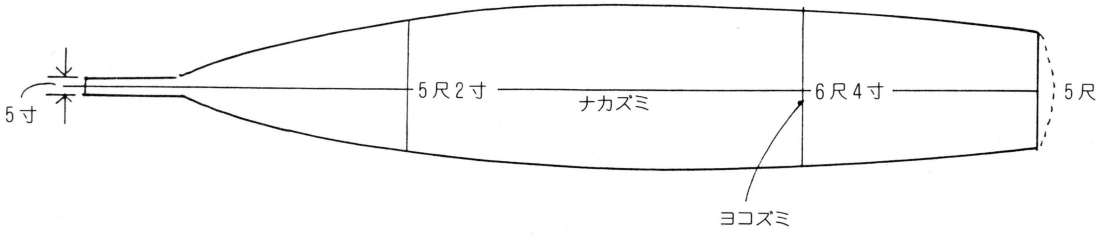
▲30年代のダンベ船

主材　杉、石数　三二石
造船日数　八五日
別材(使用部位)　ミヨシタツ…ケヤキ、
スキ・スパント(マツラ)…栗かケヤキ、
床…松
シキの厚さ　三寸
タナの厚さ　一・七寸
トタデの厚さ　二・五寸



（中央断面）





石巻市半島部の板碑

――小竹浜・スケカリ浜を除く――

石巻市文化財保護委員　佐藤雄一

1．調査期間と調査員

調査期間
平成元年一〇月四日～
平成二年二月二八日
調査員
佐藤雄一（石巻市文化財保護委員）

2．板碑の概況

石巻市に属する半島部は、かつての荻浜村に相当する地域である。旧荻浜村は明治二二年に萩浜を中心に西部から小竹浜、折浜、桃浦、月浦、侍浜、小積浜、牧浜、竹浜、狐崎浜、福貴浦、田代浜の一二ケ浜が合併して成立したものであり、江戸時代にはこれら各集落が独立して、大肝煎の支配を受けていたのである。江戸時代以前の中世にさかのぼる様子は、この地域に関する記録はなく、知ることはできないが、今回の板碑調査によって各集落に板碑の存在が確認されたので、これからはこれらを手掛かりとして、半島部の中世期が解明されることであろう。

これら半島部に存在する板碑は、小竹浜、スケカリ浜に集中的に見られ、これらはすでに『文化財だより』第一一号と第六号に調査概要を報告してある。

今回の調査は、これら密集している両地域と田代浜を除いた地域に散在している板碑が対象となっている。しかし、侍浜、竹浜については確認することができなかった。

3．板碑の図示について

板碑の図示は、基本的には一〇分の一の拓本とスケッチを併置し、スケッチには板碑の内容を記しておいた。縮尺が一〇分の一におさまらないものについては併記してある高さ、横幅、厚さから推定していただきたい。

4．年代の広がりと内容について

今回の調査で確認された板碑は総数で二〇基であり、それらが各集落に二～三基にわたって散在していた。その中で紀年銘の確認できるものは、半数にも満たない七基だけであった。しかし、その上限は鹿立屋敷五十鈴神社裏にある弘安三年（一二八〇）碑であり、宮城県内板碑の初発期に相当する。下限は月浦展望台にある永禄六年（一五六三）碑である。一応、鎌倉時代末から室町時代後期までのひろがりを確認することができる。しかし、これは七基という少ない数からの確認であり、この年代的なひろがりが半島部の板碑造立の面とどのようにかかわっているかは皆目不明といわなければならないし、半島部の密集地と思われる小竹浜、スケカリ浜とともに総合的に観察されるべきものであろう。

しかし、今回の調査で半島部に散在している板碑には市部における板碑に劣らず内容の濃いものがあることが確認された。

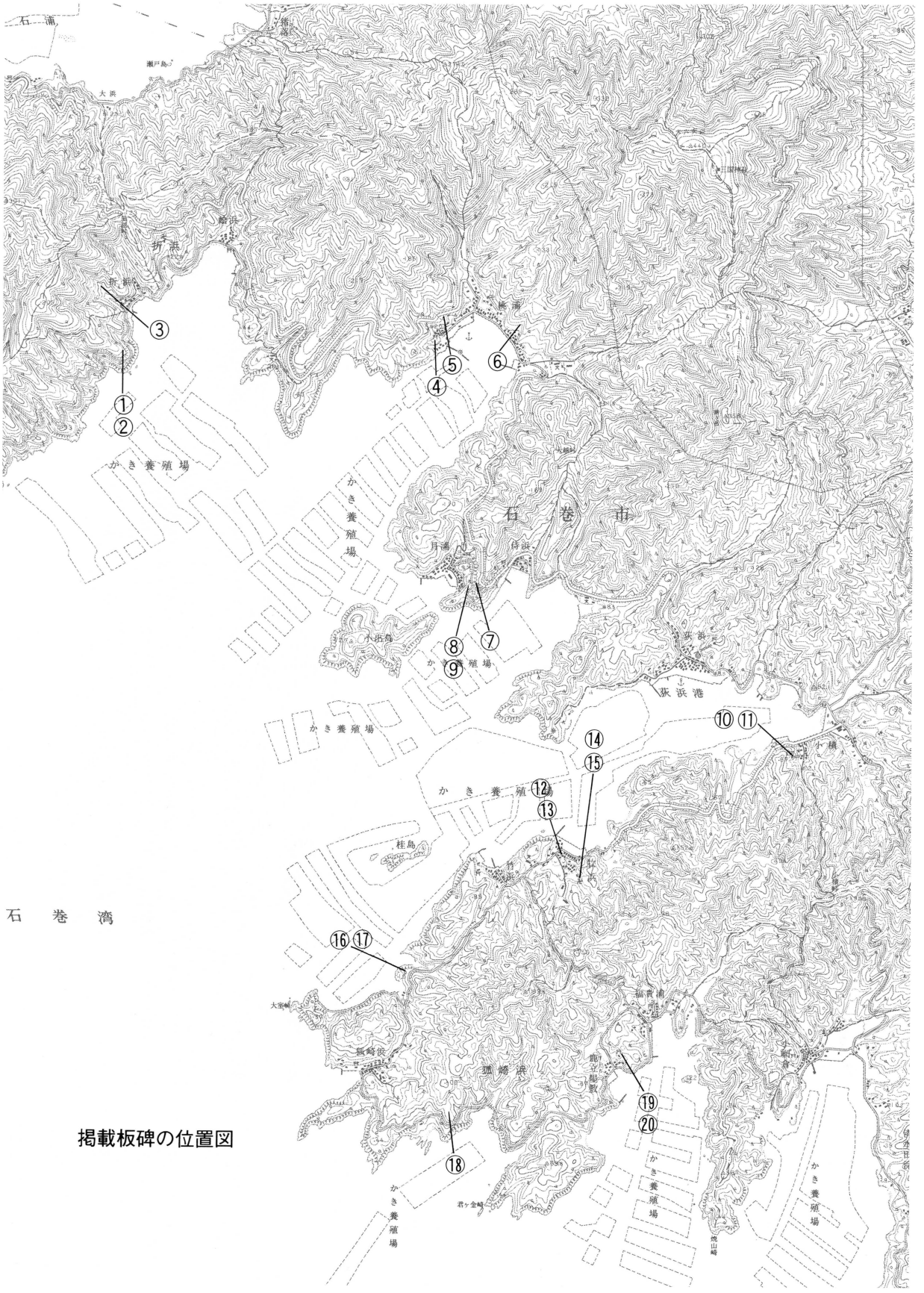
半島部における板碑の特殊性はスケカリ浜の双式板碑によってひろく知られているところだが、今回の調査によっても、その内容の特殊性が確認されるように思われる。

たとえば月浦墓地にあるNo.9の応永二五年（一四二八）碑のように高さが二メートル以上もある十三仏板碑の存在である。この碑には、板碑が大日如来の三麻耶形を表わすものであることを明記してあり、碑全体は大型板碑であるにもかかわらず比較的薄手につくられ、十三仏種子ならびに銘文の彫り方にも格調の高い内容を見ることができる。さらに、No.8のように、同じ月浦地区ではあるが、前記の十三仏板碑の造立から一世紀以上も経過している永禄六年（一五六三）碑は、通常この時期は板碑造立の衰退期とされ数量も極端に少なくなり、型も小型化、内容も簡単になるのにもかかわらず、この永禄六年碑は、十三仏を刻し、さらに月輪に五点具足のバーンク（金剛界大日如来）を配しており、銘文にいたっては、三行八五字を刻しており、内容・形式ともに、板碑最盛期のものに匹敵するものをもっている。また牧浜三国哲男氏宅地内の、カーン（不動）種子と「初七日敬白」とだけ刻してあるNo.12の小型の板碑は、種子と初七日だけのいたって簡単なものとして見過ごされてしまうようなものであるが、十三仏信仰における初七日の主尊がカーン（不動）であることを考えれば、石巻市内において数多くの板碑が十三仏信仰における忌日と主尊が合致している事実と一致することがわかり、この小型板碑は、半島部においても十三仏信仰の普及があったことを知らせてくれる貴重な碑であるということができる。

5．保存について

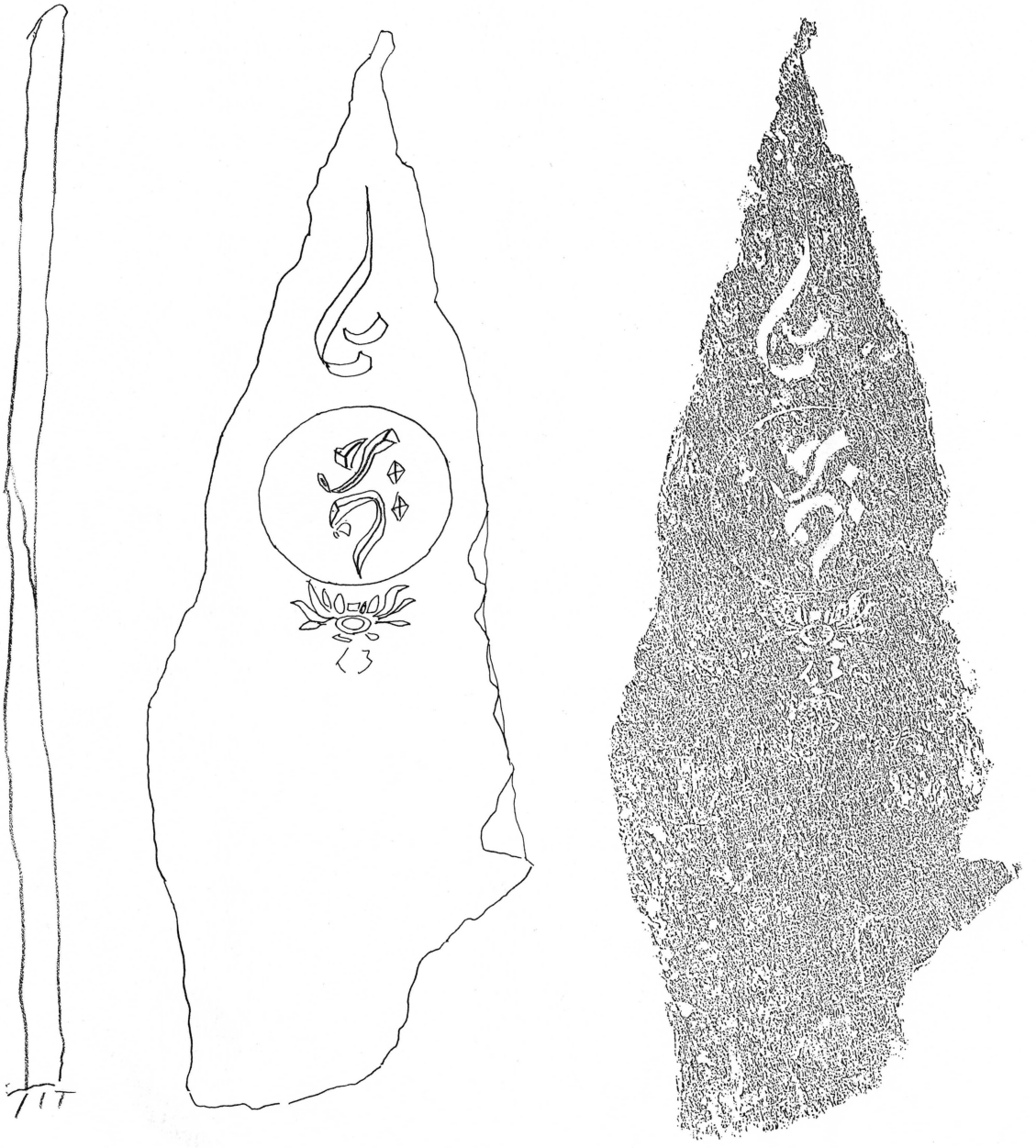
小竹浜、スケカリ浜に集中している板碑をのぞいた各集落の板碑は、それぞれ二、三基と数量こそ少ないが、市部では見られないような特色をもったものが多く、これらは石巻市半島部の板碑として限定された地域で観察されるべきものではなく、牡鹿半島における板碑群の一部として、牡鹿半島に散在する他の板碑とともに総合的に観察されるべきものであることは言うまでもないであろう。また、そうすることによって、これら板碑の正当な評価がなされるものと思われる。

よって、ややもすれば見失われがちになる、これら散在する板碑にも、保存のための十分な配慮がはらわれてしかるべきである。

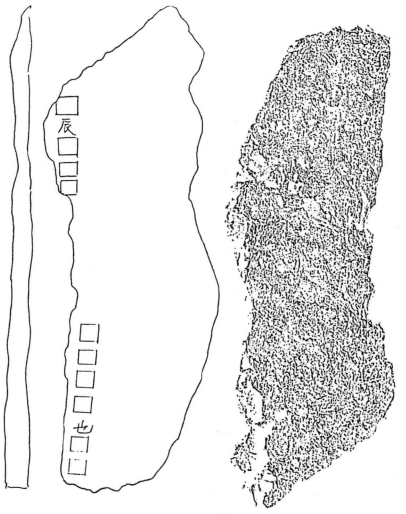

石浦
瀬戸島
大浜
折浜
③
①
②
かき養殖場
石巻市
月浦
侍浜
⑤
④
⑥
⑧
⑨
⑦
小船島
狐浜港
⑩ ⑪
⑭
⑮
⑫
⑬
桂島
石巻湾
⑯ ⑰
大室崎
福貴浦
狐崎浜
⑲
⑳
⑱
君ヶ金崎
鬼山崎

掲載板碑の位置図

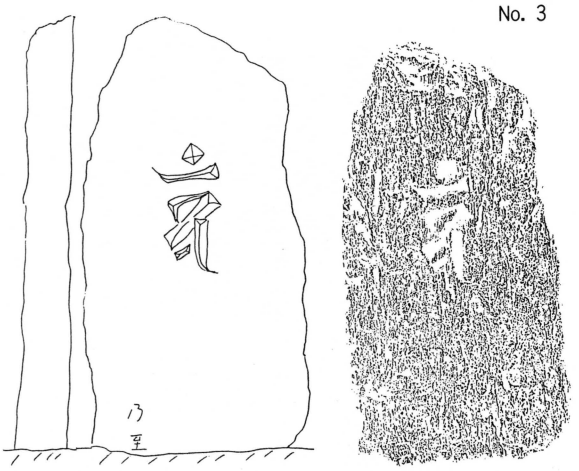
No. 1



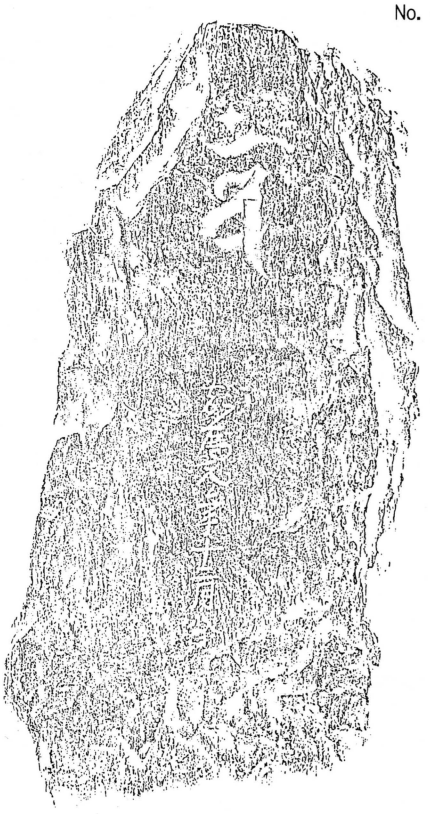
No. 2



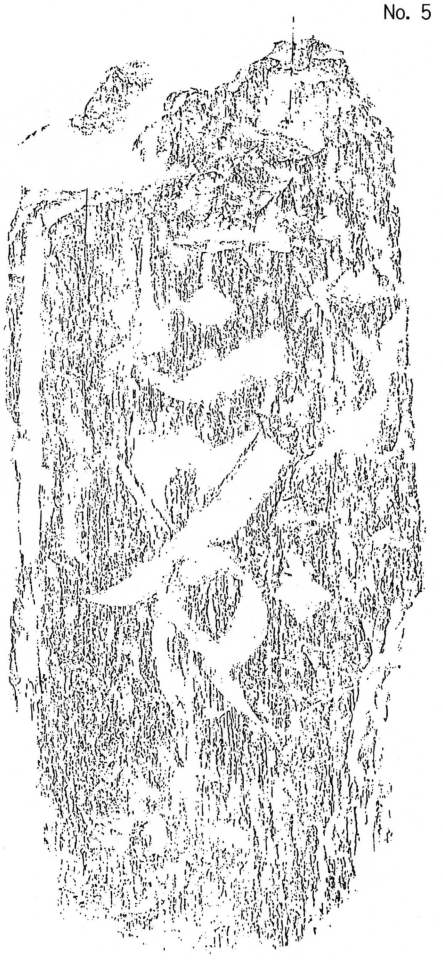
No. 3

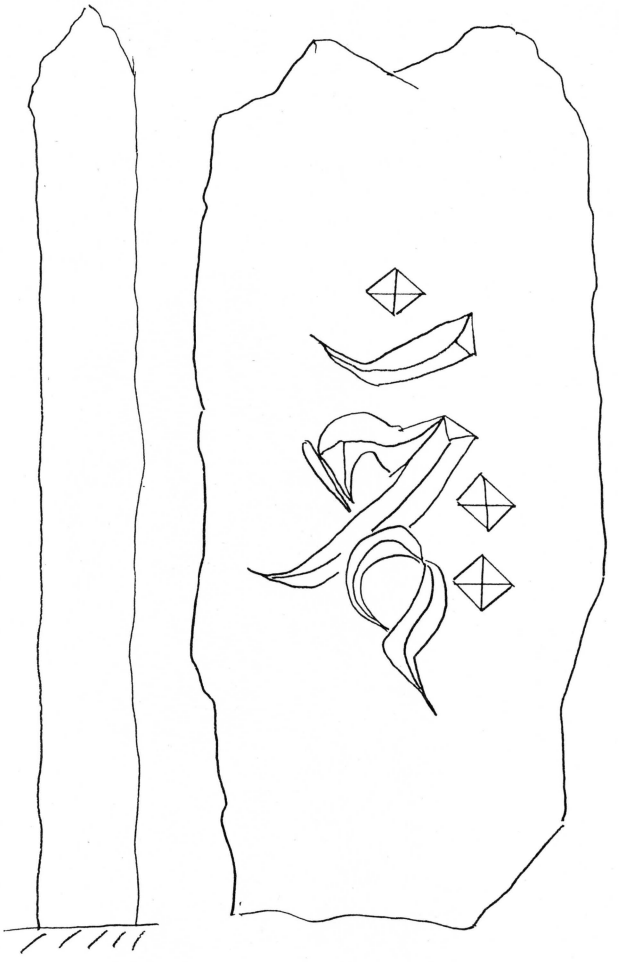


No. 4

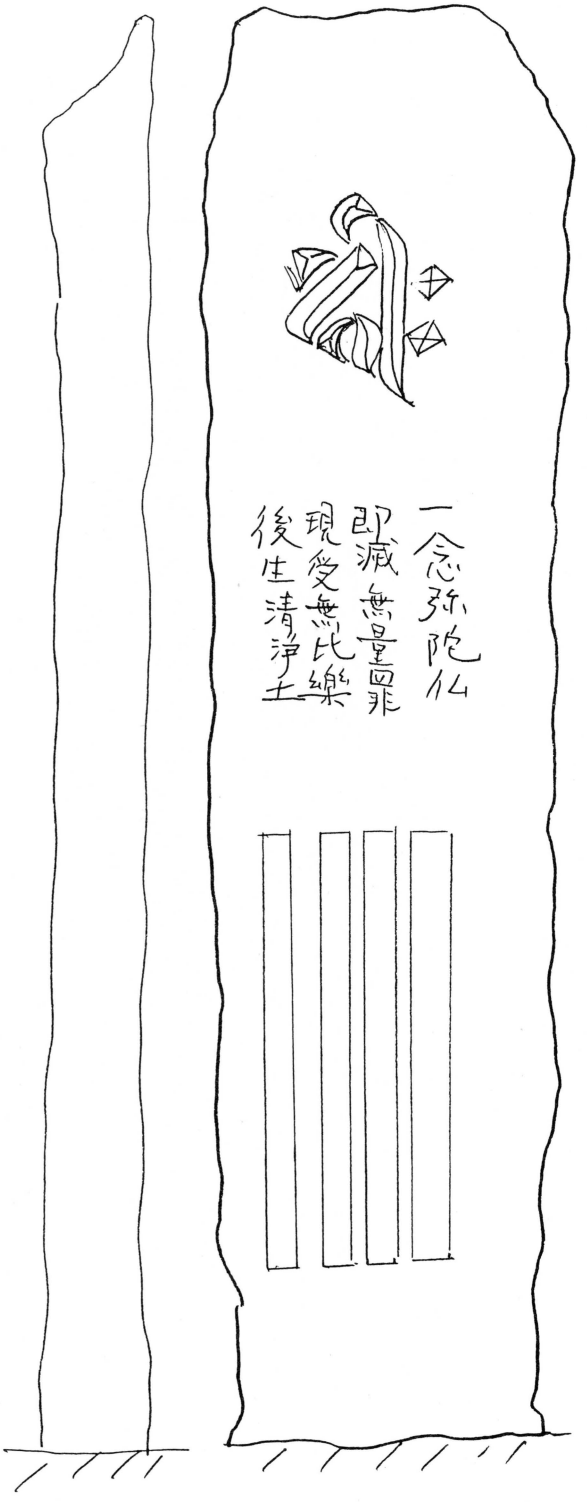


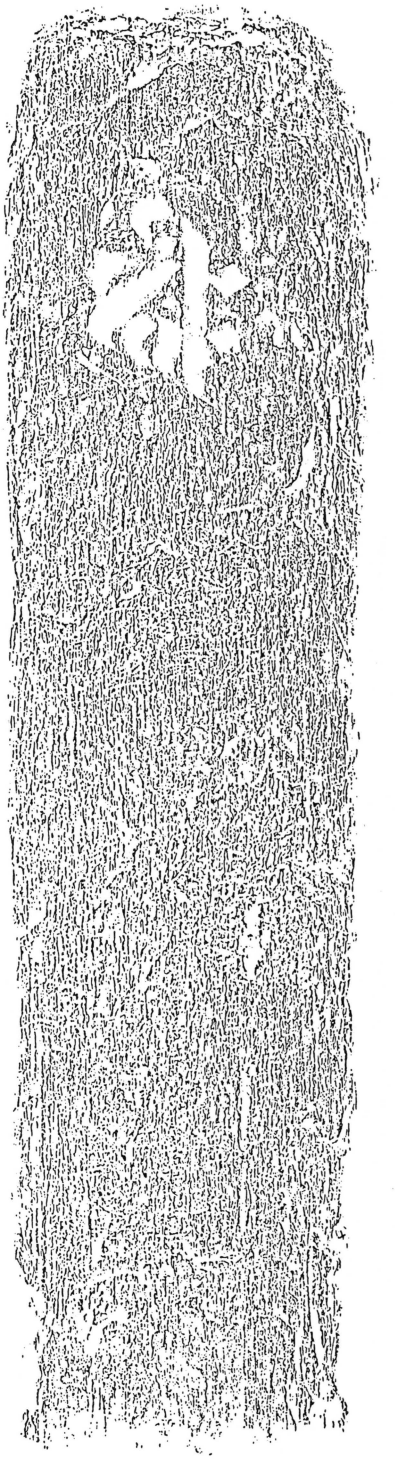
No. 5



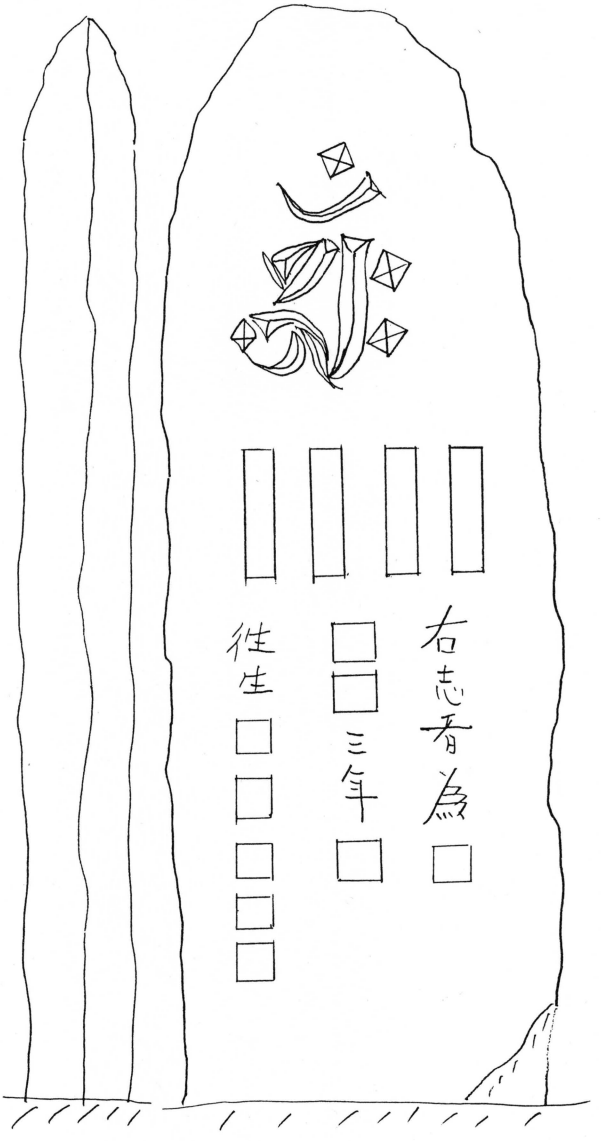


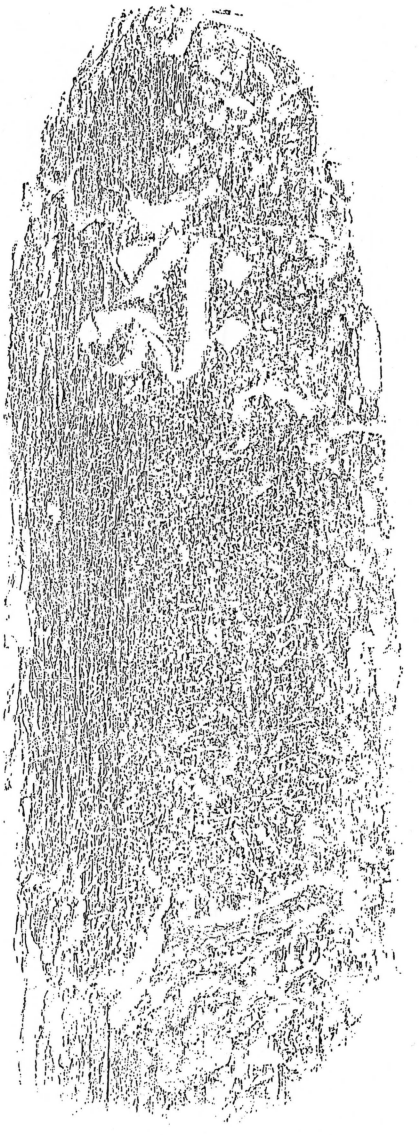
No. 6

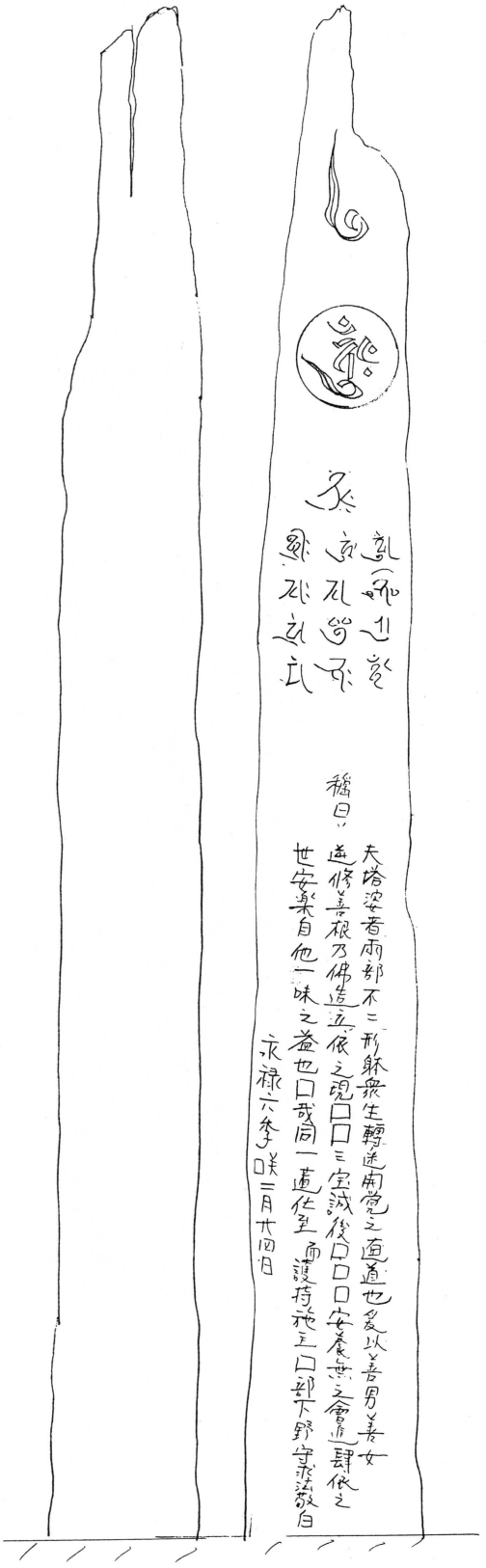


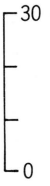


No. 7







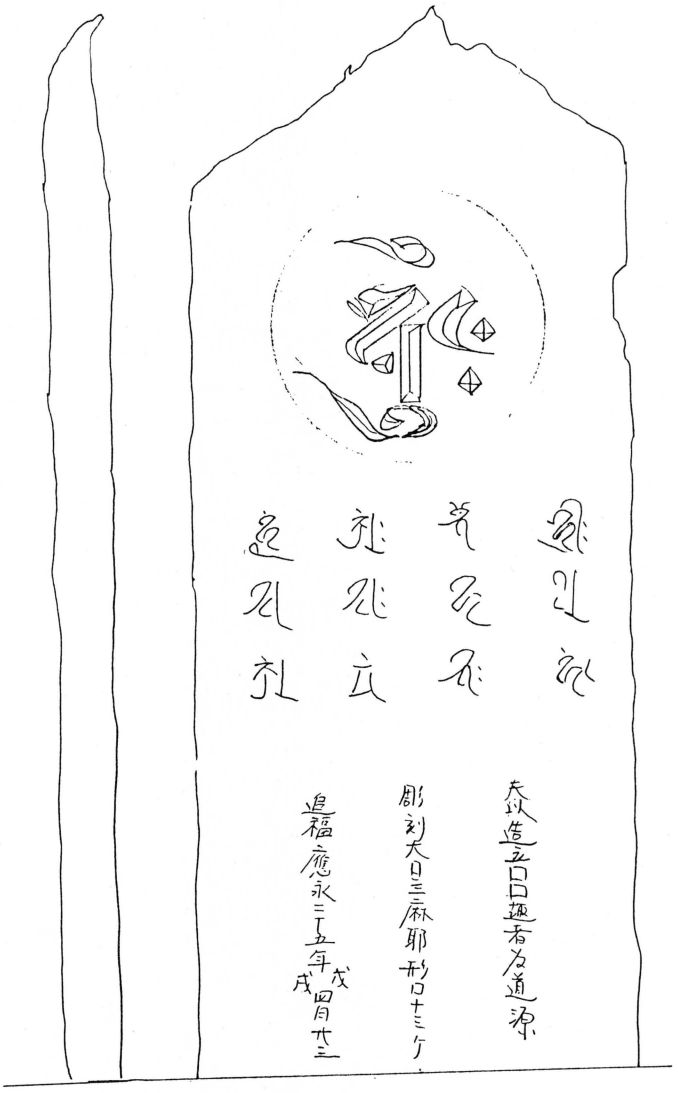


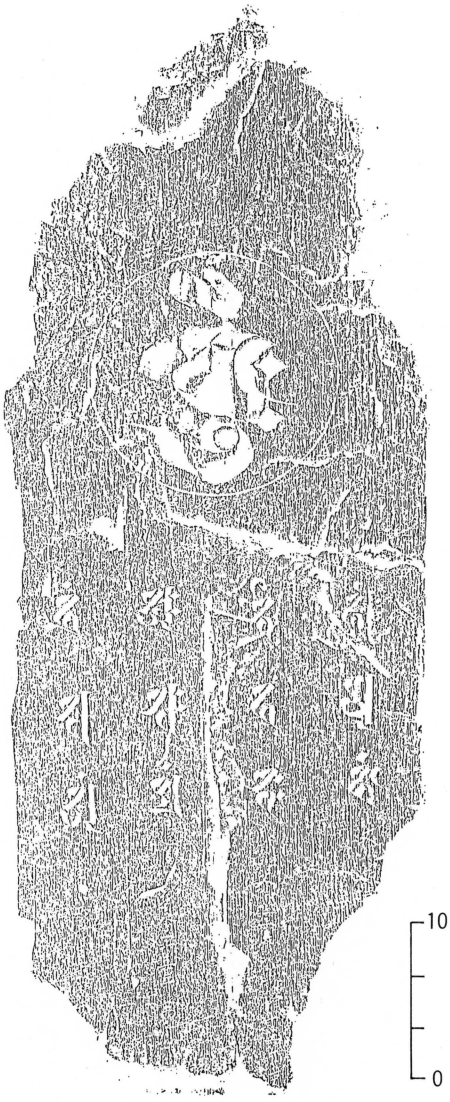
No. 8

石巻市月浦（展望台）

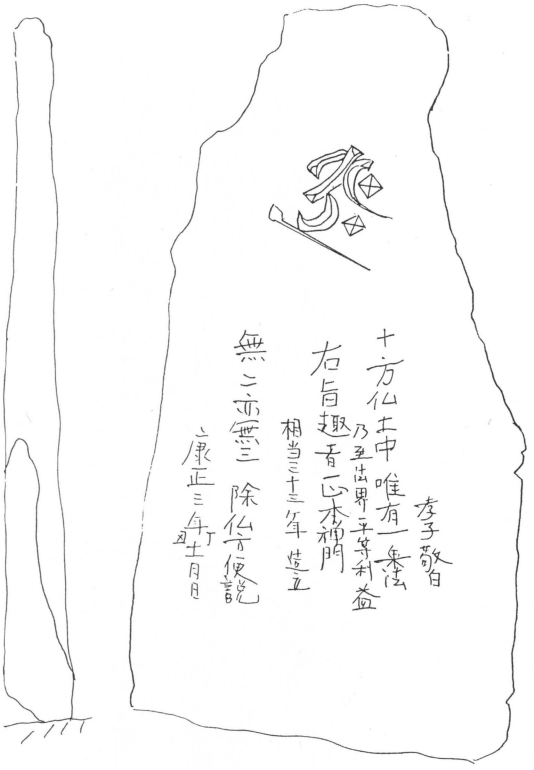
H～285
N～34
T～10

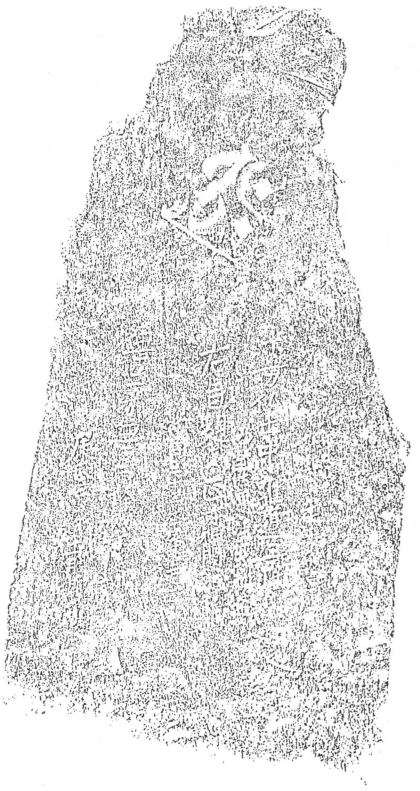
No. 9





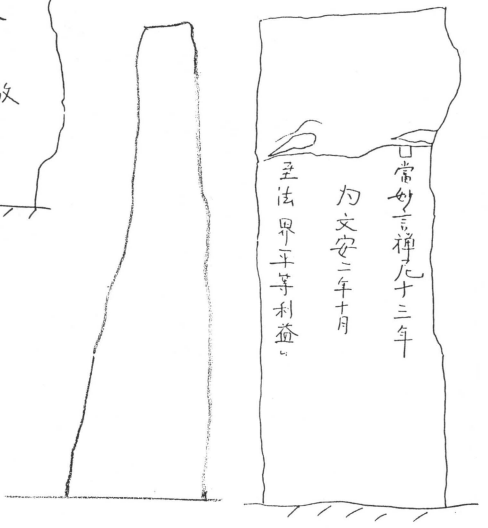
No. 10

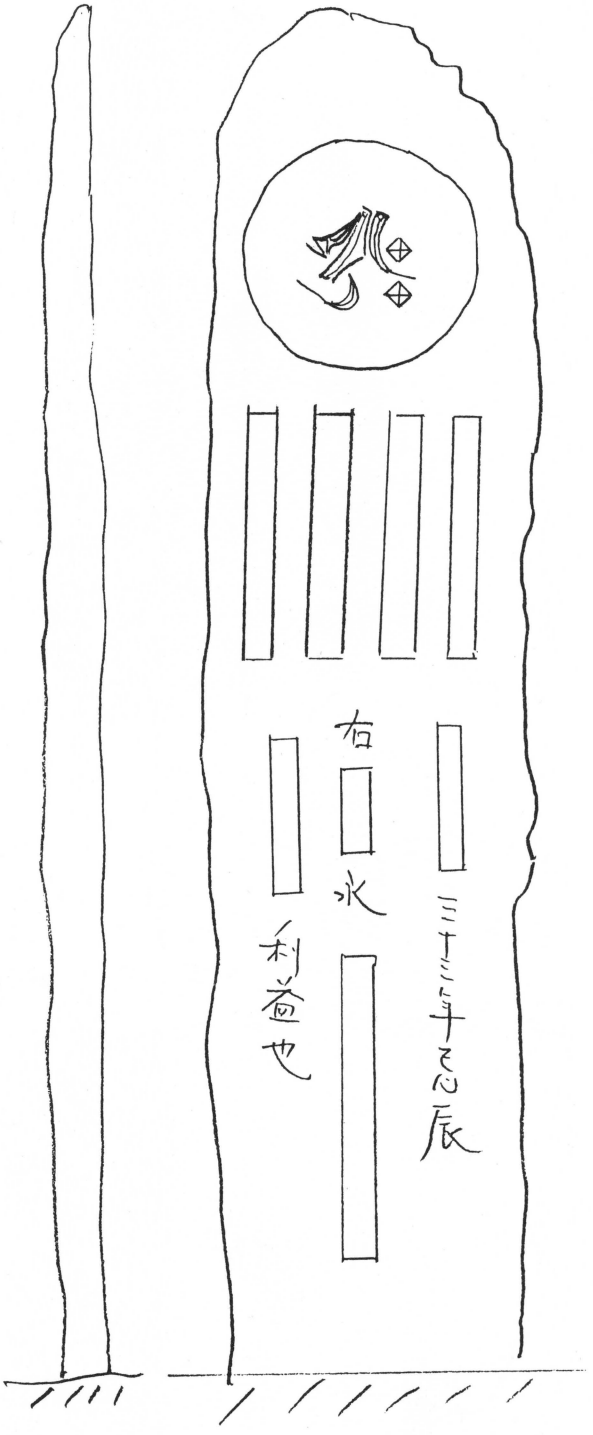




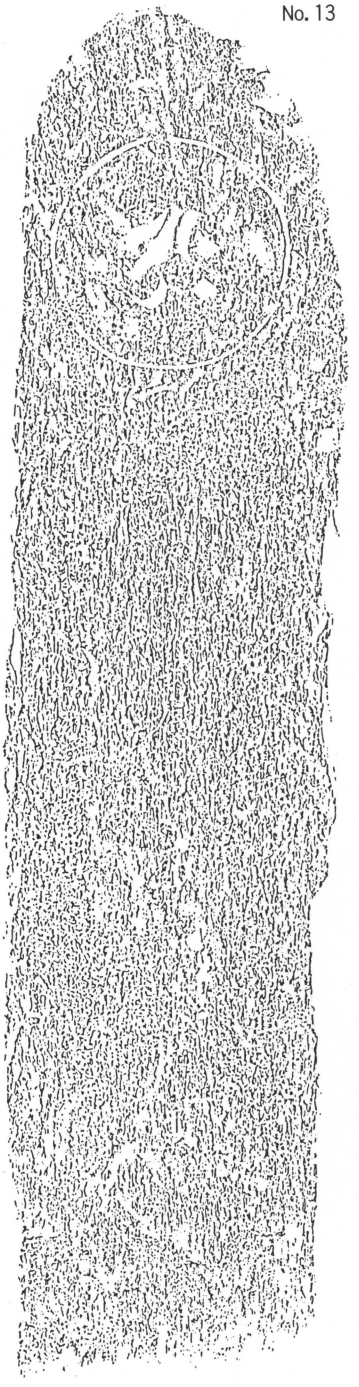
No. 12

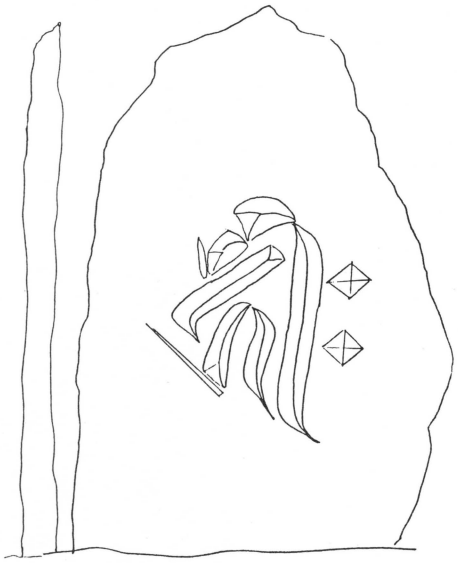
No. 11

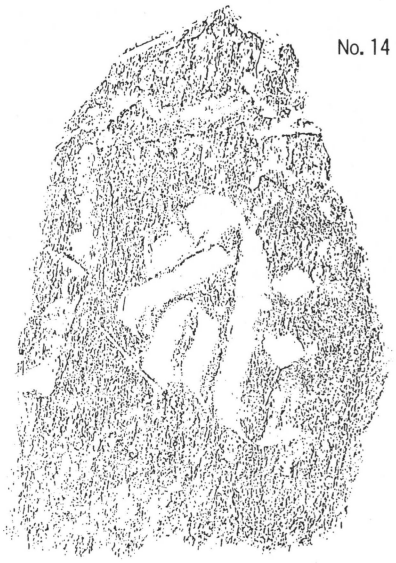




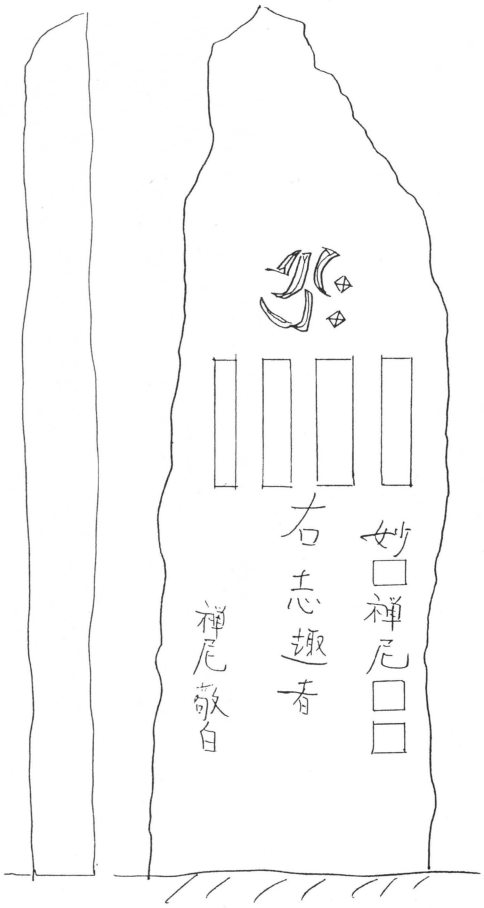
No. 13

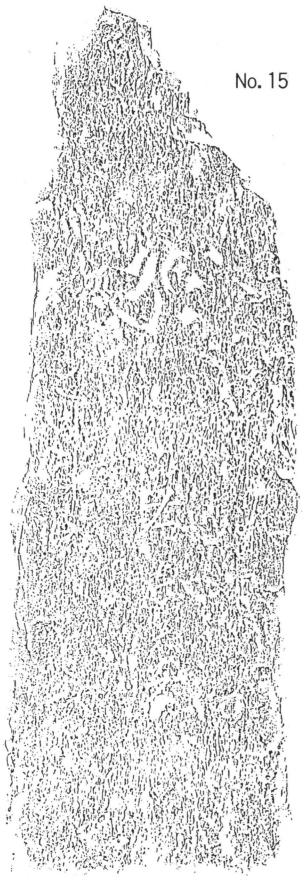






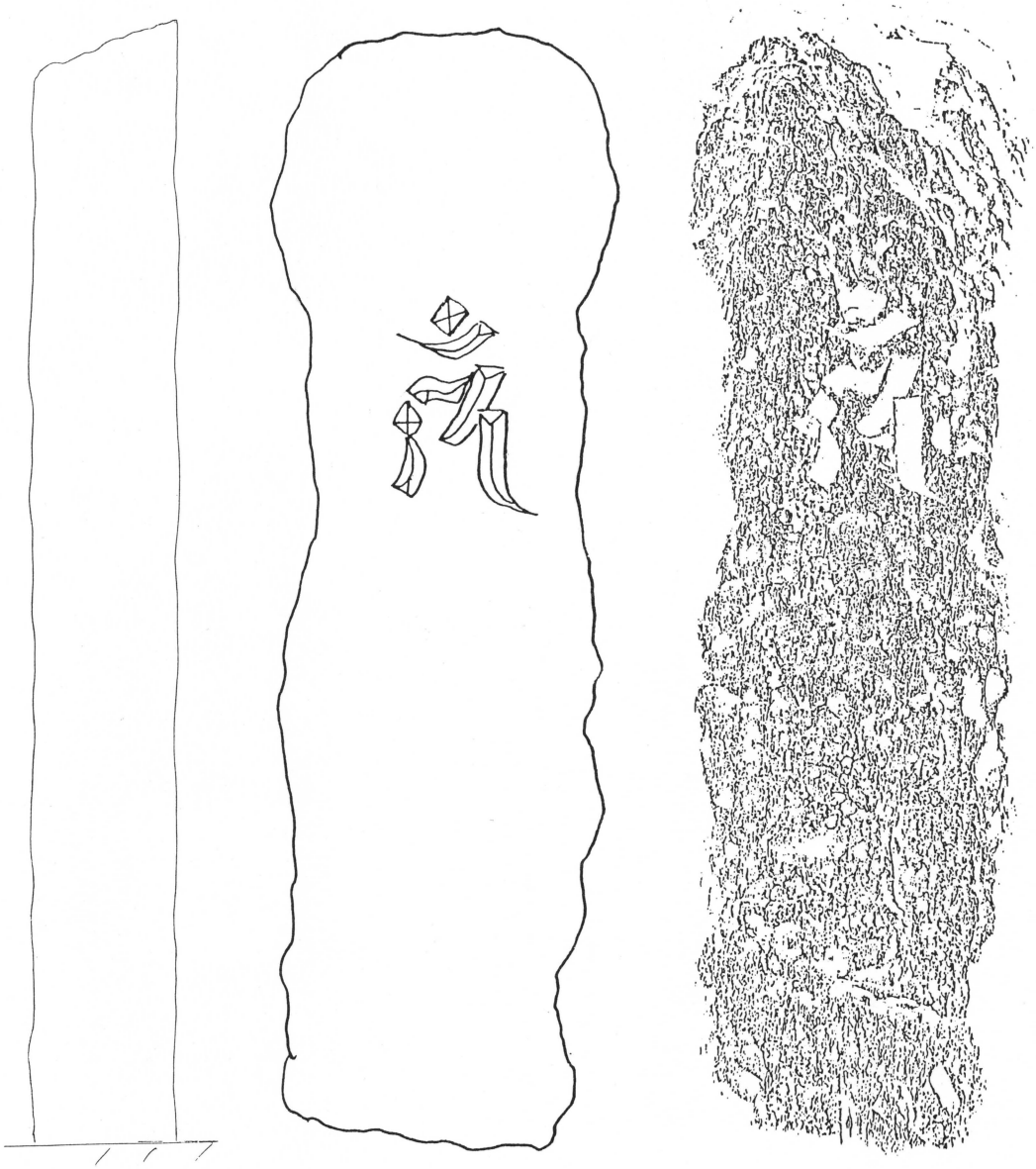
No. 14



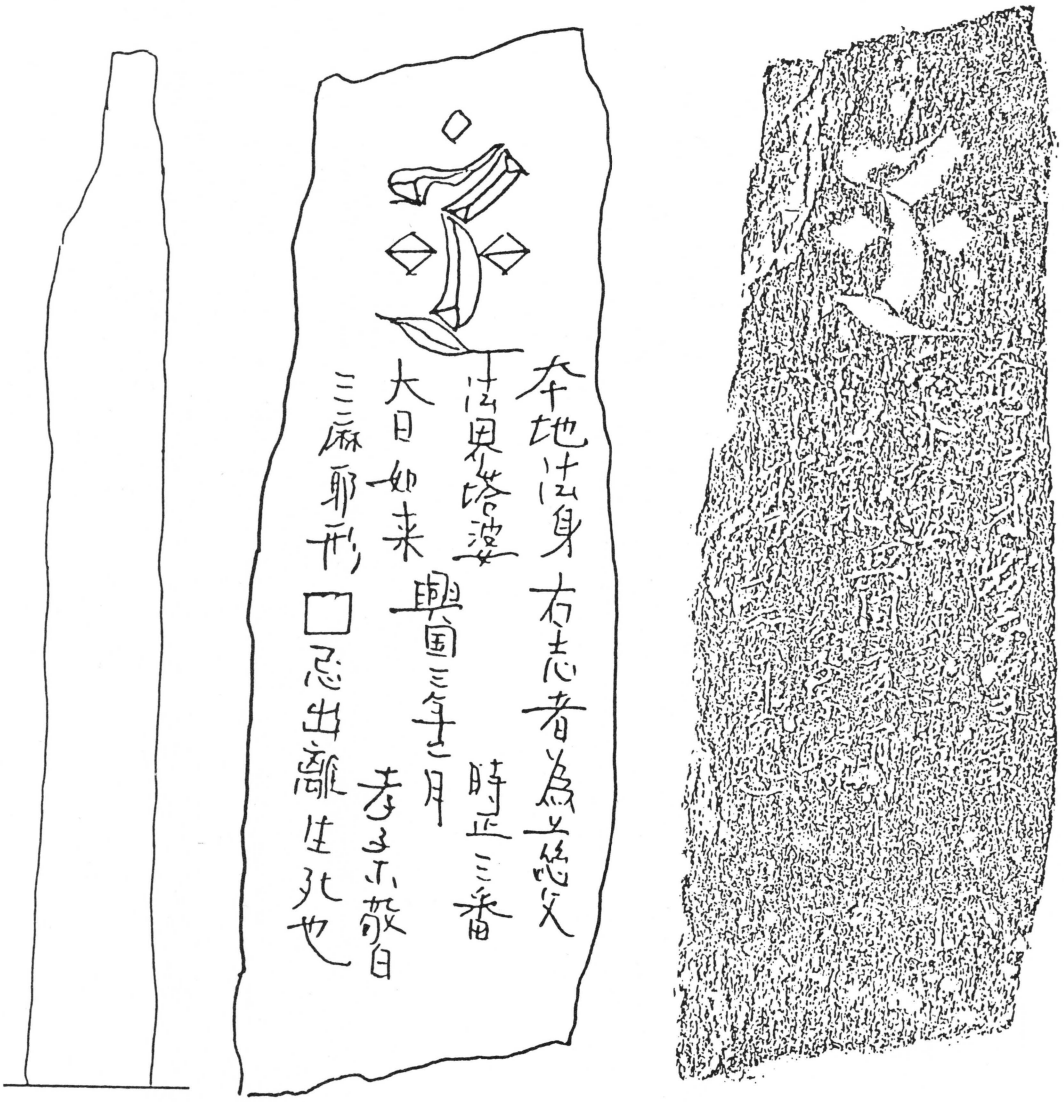


No. 15

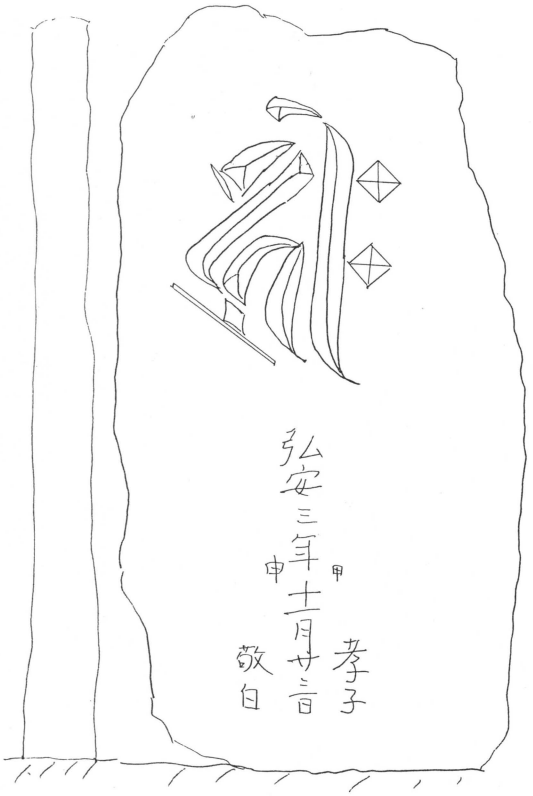
No. 16



No. 17

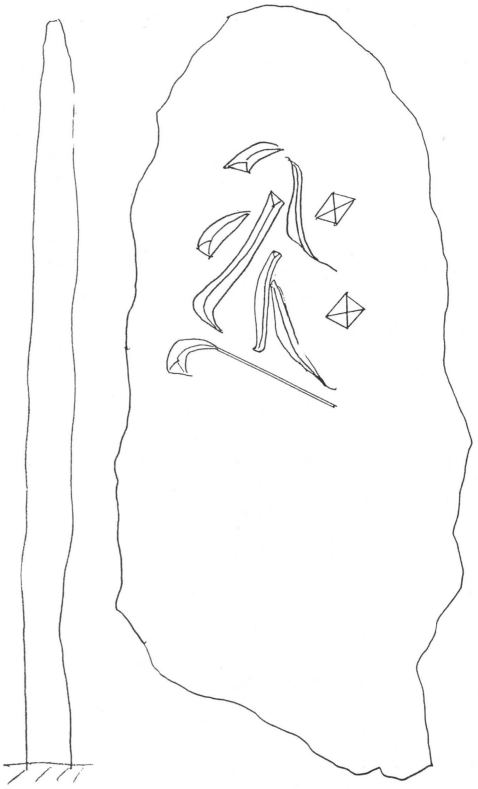


No. 18



No. 19

30
20
10
0



No. 20

30
20
10
0

旧町名表示石柱設置事業

由緒ある町名を後世に

―町名は文化財―

昭和三七年（一九六二）に「住居表示に関する法律」が制定されてから、昔からの由緒ある町名が新しい町名に置きかえられるようになり、旧い町名はそこの住民からも忘れられてしまうような状況になりました。石巻市も例外ではありません。町名は、私達の祖先がその土地とどのようにかかわってきたかを知る重要な手掛かりであり、かけがえのない文化財です。

今、日本各地では、町名も文化財であるという認識を持ち、住居表示を行わない、あるいは、なるべく旧い町名を生かす、さらに失われつつある町名を記録のなかでだけでも保存するなど、何等かの方法で町名を遺す運動が起きつつあります。

石巻市教育委員会では、すでに使われなくなった由緒ある町名を後世に伝えるため、旧い町名とその由来を石に刻んでその地区に建立する事業を昭和五六年度から行って平成元年度までに一九本を設置いたしました。本年度は「鰐町」と「蛇田町」の二本を設置し、これで合計二一本になりました。

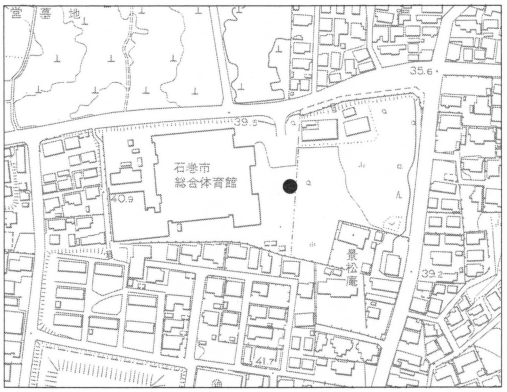
設置にご協力をいただいた方々に厚くお礼申し上げます。

鰐山

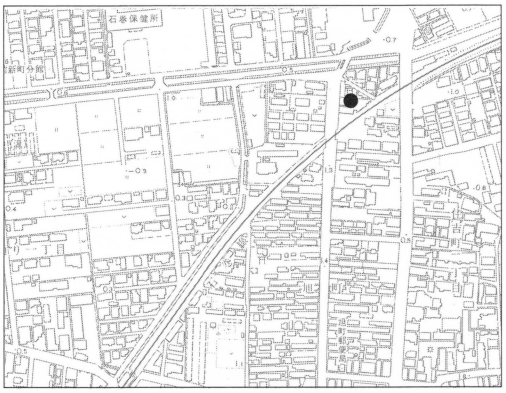
奈良時代前期、大和朝廷が桃生牡鹿石巻地方の海道蝦夷征圧のための拠点として「牡鹿柵」を建置。当初軍事施設だった同柵は後に郡衛へ移行したとみられている。その建置場所は桃生郡矢本町赤井遺跡に比定され、平安初期以降には、石巻市清水尻遺跡へ移ったものと推定されているが、両地点間に東西に横たわる丘陵地帯は古来、郡司だった丸子（わにこ）氏一族の居館跡の伝承にちなみ、ワニ山（その一角には「郡長山」の古称も残る）と呼びならわされてきたという。

蛇田町

寛文六年（一六六六）当時、自分の馬で宿場と宿場間の貨客を運ぶ伝馬役に従事していた石巻村の農民は、所有田畑が僅少で生活が苦しいため、伝馬役の継続は不可能の旨を上申。仙台藩は、彼らに蛇田村の全耕地の三分の二を与えて伝馬役を継続させ、蛇田村の農民には石巻村続きの蛇田町へ移住させて農地を与え、宿場並みの町に整備した。明治二年の地租改正によって石巻村へ編入された蛇田町には、県風紀行条例改正に伴い、同二十二年石巻の全遊廓が移転。以後、旭町と改称された。



◀鰐山（総合体育館駐車場）



◀蛇田町（鳥屋神社境内）

平成元年度まで設置した旧町名石柱

≪昭和56年度設置≫
『新田町』＝千石町（石巻グランドホテル前）
『渡波本町』＝渡波町三（内海笑方前）
『湊本町』＝湊町一（湊幼稚園前）

≪昭和57年度設置≫
『横町』＝千石町（河北新報社前）
『中町』＝中央二（ダックシティ丸光石巻店前）
『九軒町』＝門脇町二（消防第三分団前）

≪昭和58年度設置≫
『立町』＝立町一（仙台銀行前）
『面剣田』＝清水町一（ニイヌマビル前）

≪昭和60年度設置≫
『後町』＝門脇町二（西光寺前）
『袋谷地』＝水明南二（長林寺前）

≪昭和61年度設置≫
『本町』＝中央一（旧中央郵便局前）
『坂下町』＝中央一（永巌寺参道入口）

≪昭和62年度設置≫
『本草園』＝双葉町（双葉町公園内）
『御所入』＝湊字御所入（御所入公園内）

≪昭和63年度設置≫
『田町』＝八幡町一（拝幣志神社境内）
『東町』＝湊町四（稲井嘉明氏宅前）

≪平成元年度設置≫
『裏町』＝中央二（まるみ呉服店前）
『小野寺横丁』＝立町一（梅屋分店前）

平成二年度 文化財めぐり

平成二年度も例年どおり、三回の文化財めぐりを実施しました。

第一回文化財めぐりは、市内の歌碑・句碑を徒歩でめぐった「石巻市内の歌碑・句碑をたずねて」として六月に行いました。第二回は、一一月四日に「中世の石巻をたずねて」と題し、稲井・湊地区の文化財をめぐりました。第三回は、昨年に引き続き松尾芭蕉の足跡を追った企画として岩手県へ足をのばし、「―芭蕉の足跡を追って―岩手県南の文化財をたずねて」を、一一月一八日実施しました。

第一回文化財めぐり
石巻市内の句碑・歌碑をたずねて

月　日　六月一〇日（日）
講　師　佐藤雄一文化財保護委員
参加者　二五人

前日まで降っていた雨も朝には晴れあがり、絶好の日和となった第一回文化財めぐりは、午前九時に住吉公園に集合し、住吉公園内の歌碑・句碑を見学した後、寿福寺、永巌寺不動堂、鳥屋神社をまわり、日和山公園内の歌碑・句碑を見て、昼すぎ解散しました。

石巻市内には、江戸時代から最近までの歌碑・句碑等の文学碑がたくさんあります。特に明治期に活躍した保原花好（ほばらかこう）の句碑は数多く立っています。

この文化財めぐりを機会にこうした隠れた、ローカルな文化活動に関心を持ってもらえたと思います。

第二回文化財めぐり
中世の石巻をたずねて

月　日　一一月四日（日）
講　師　佐藤雄一文化財保護委員
参加者　一三人

第二回文化財めぐりは、あいにくの雨のなか、稲井・湊地区の中世の石巻にかかわる文化財を見学しました。雨のためコースを変更、短縮し、市役所前を出発。龍洞院・南境館跡・的場石・鷲ノ巣・高木観音堂板碑群・牧山零羊崎神社を見学しました。

中世の石巻について認識を深めてもらうことができたと思います。

第三回文化財めぐり
―芭蕉の足跡を追って―
岩手県南の文化財をたずねて

月　日　一一月一八日（日）
講　師　石垣　宏文化財保護委員
川名紘一文化財保護委員
参加者　五〇人

朝八時三〇分、市役所前を出発し、一路、水沢の黒石寺に向かい、同寺を見学後、正法寺・中尊寺・高館・柳御所跡、毛越寺をめぐりました。

岩手県南部は、古代、世の文化財の宝庫で、盛り沢山な内容の文化財めぐりとなりました。また、帰りの車内で、参加した方々の詠んだ俳句を披露しあい、和気あいあいのなか、石巻へ帰って来ました。

うたまくら　訪ぬる車窓　つるし柿
夕づきし　毛越しの寺の　池めぐる

（参加者の作品から）

▶第一回文化財めぐり（日和山）

▶第二回文化財めぐり（南境館跡）

◀第三回文化財めぐり（毛越寺）

文化財標柱・説明板設置事業

文化財を大切にしましょう

石巻市内には、二つの国指定文化財、三つの県指定文化財、二一の市指定文化財、そして一〇〇か所余りの周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）があります。

石巻市教育委員会では、こうした文化財があることをみなさんにお知らせするために、標柱や説明板を設置する事業をすすめています。

これら文化財として指定・登録されている物、土地の現状を変更しようとするときは、法律や条例による届出が必要です。特に周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）で土木工事や住宅建設を計画したときには、できるだけ早く当教育委員会へ相談してください。

文化財は、保護してあたりまえのものです。しかし、その保護と市民の生活とは互いに調整して行われなければなりません。この調整をうまく行うためにも、そこが何かの文化財・遺跡であるという標柱が建っていたり、聞いていたときは、可能なかぎり早く相談してください。

本年度は、標柱五本、説明板二基を設置しました。設置にあたり御協力いただいた関係各位にお礼申し上げます。

【説明板】

宮城県指定史跡　**仁斗田貝塚**

仁斗田港の北側の崖の上、数段の畑地が、宮城県指定史跡仁斗田貝塚です。遺跡全体の面積は約三、二〇〇平方メートルに達すると推定される貝塚で、一番古いものとしては、縄文時代前期（約七〇〇〇年前）の土器が発見されています。ただし、出土する遺物の大部分は、縄文時代中期から後期（約四八〇〇年から三七〇〇年前）のものです。

宮城県内の貝塚は、アサリ・ハマグリ・シジミといった砂浜に生息する貝が多く出土しますが、ここからは、カキ・レイシなどの岩場に生息する貝が主に出土します。このような貝塚を岩礁性貝塚といい、仁斗田貝塚は、保存状態もよく、全国的にも貴重な遺跡であるので、昭和五〇年四月に宮城県の史跡に指定されました。

貝塚からは、貝のほかに土器や石器・骨角器などが出土しています。これらの出土品は、縄文時代のことを調べるのにたいへん重要な資料となっています。

仁斗田貝塚の現状を変更し保存に影響を及ぼす行為を行なおうとする場合は、事前に宮城県教育委員会の許可が必要です。

平成3年3月

祝田浜の両墓制

両墓制はいうのは、死体を埋める埋め墓と、その死者の霊をまつる参り墓とを二重にもつ、土葬による墓制です。祝田浜では、埋め墓を身墓（ミハカ）、参り墓を空墓（カラハカ）と呼び、埋め墓は平石、参り墓は石塔の墓標です。旧家の阿部家（数戸）のみに伝えられ、他家は単墓制です。

この墓制は近畿地方に多く分布し、国の南北端（九州・東北地方）には実例が少なく、宮城県では祝田浜しかありません。

一般に、埋め墓は葬式のときだけ行き、あとは参り墓だけを拝むところから、死体はけがれたものだから打捨て、霊だけを拝むという古い民俗に根ざしていると思われてきました。しかし、祝田浜では、盆、正月、彼岸など両方に参っているので、その発生原因になお問題があるようです。

【標柱】

仙台藩穀倉跡

藩は川村孫兵衛重吉に命じ、北上河道改築の大工事を行い、石巻に港を開き藩倉を設けた。開港後約二〇年を経た正保二（一六四五）年この辺一帯に大規模な江戸回米用倉庫を建設、宝暦三（一七五三）年の記録には、十八棟の穀倉があったと記されている。

新金沼遺跡

鉄滓と古代の土器が出土する遺跡で、標高2メートルから3メートルの微高地上に位置している。

釜西古墳群

この遺跡は、元来円墳で高さ四メートル、直径約一五メートル程度あったものと思われる。しかし、残存する墳丘が半壊し、変形しているため、製作年代や埋葬状況については不明である。

石巻市指定文化財　**龍泉院のイチョウ**

龍泉院境内に立つこのイチョウは、枝張りがよく大きく整った樹形をもつ石巻市の代表的なイチョウである。雌株で根回り七・二メートル。市内で高木吉祥寺のイチョウに次ぐ巨樹である。晩秋には黄葉して美しい景観を見せてくれる。

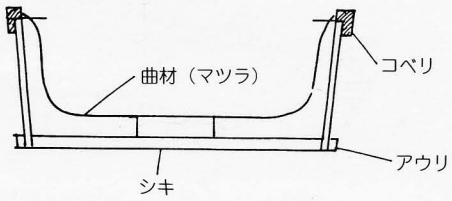
石巻市指定文化財　**吉祥寺イチョウ**

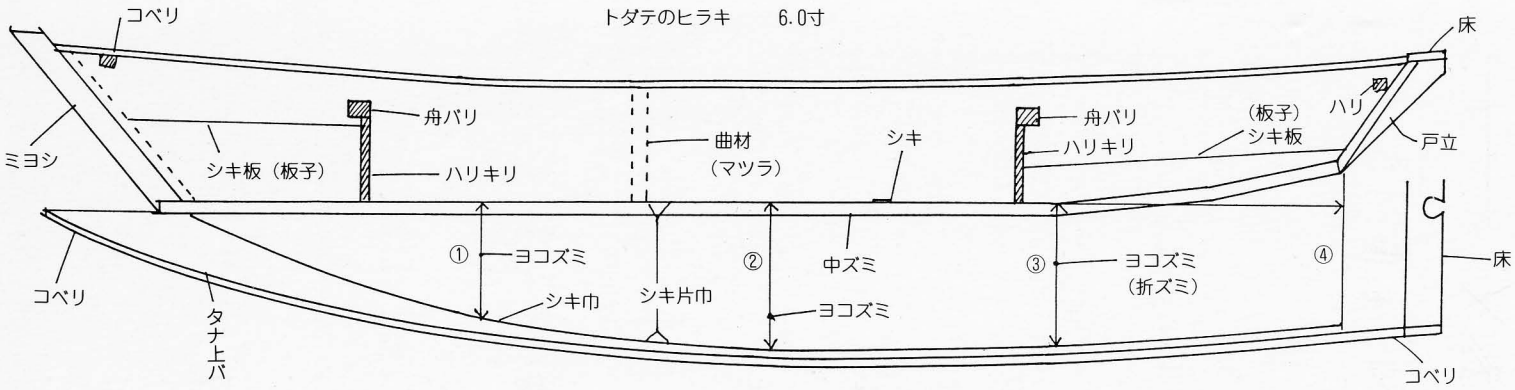
この吉祥寺の山門に立つ二株のイチョウは、石巻市の代表的なイチョウで、ぎんなんのなる雌株である。

それぞれの根回りは九メートルと7メートルで、乳の垂れたような瘤のみられる北側の株は市内最大の巨樹である。

図1　小竹　イッカイ棚

シキ長サ	15尺5寸	シキの厚さ	1.5寸
シキ巾	3尺7寸	ナカダナの厚さ	1.0寸
深サ	1尺4寸	戸立の厚さ	1.5寸
		ミヨシのヒラキ	7.0寸
		トダテのヒラキ	6.0寸





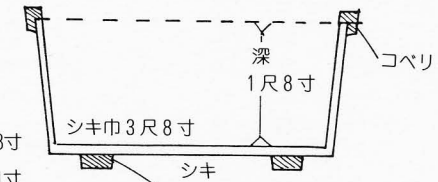
シキの型どり

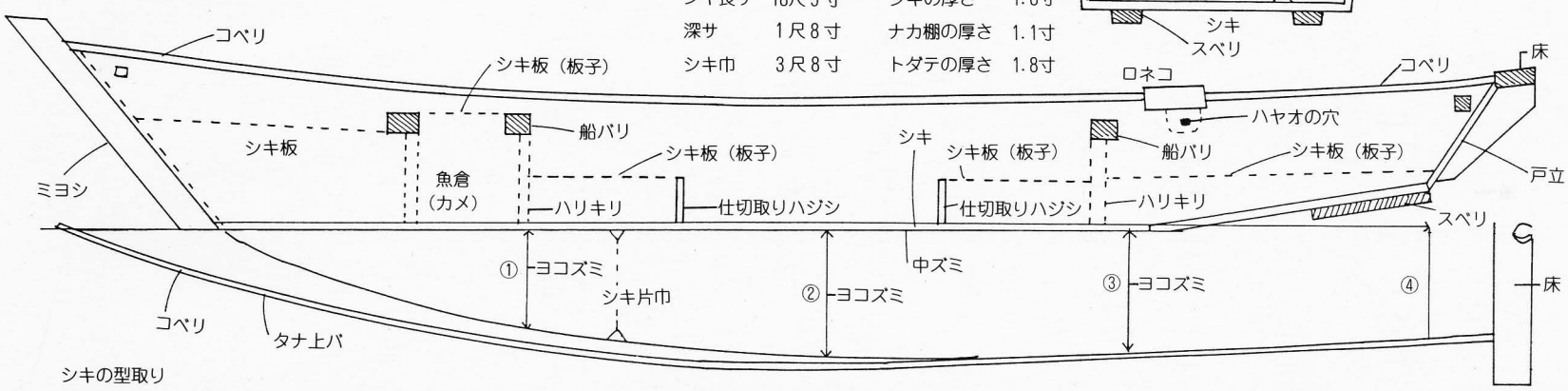
①3尺　②3尺7寸　③3尺6寸　④3尺

（図は折ズミで①3尺×½になっている）

図2　女川町江島サッパ

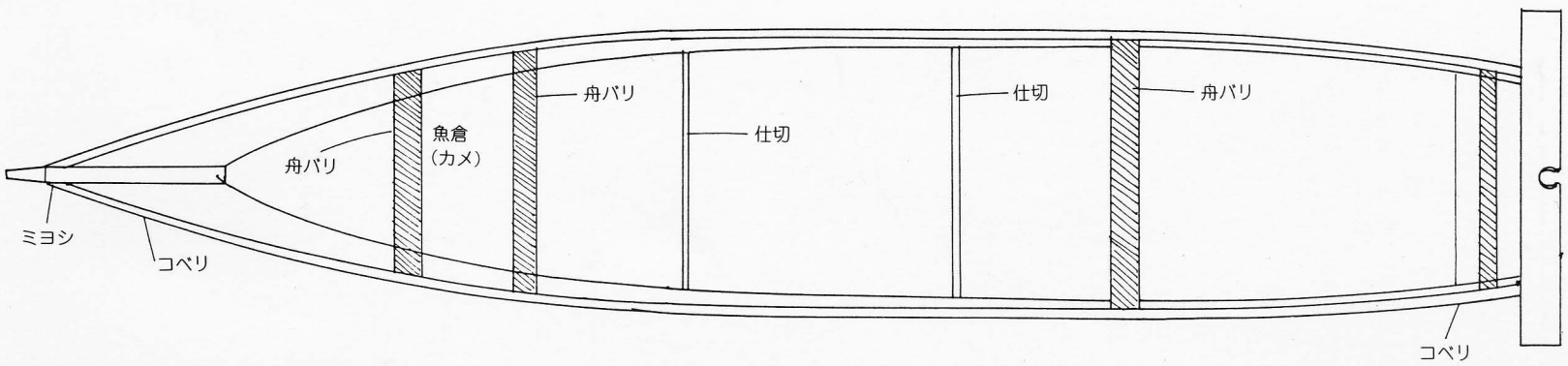
シキ長サ	18尺5寸	シキの厚さ	1.8寸
深サ	1尺8寸	ナカ棚の厚さ	1.1寸
シキ巾	3尺8寸	トダテの厚さ	1.8寸





シキの型取り

①3尺3寸　②3尺8寸　③3尺6寸　④3尺3寸（図は折ズミで①は3尺3寸×½）



作図ー阿部忠雄大工　縮尺 $\frac{1}{30}$

石巻市文化財だより（第20号）

平成３年３月30日　印刷
平成３年３月31日　発行

発行：石巻市教育委員会
石巻市日和が丘一丁目１番１号
電話（0225）95-1111 内線 345

印刷：株式会社 鈴木印刷所
石巻市蛇田新谷地前121
電話（0225）22-4101